明治四十五年七月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百七十二號

婦人衞生雜誌

第二百七十二號目次

講演

叢談

育兒

家庭衞生

雜報

廣告

會告

●本月は前半期決算期に候間會費未納の御方は本年十二月迄の前金相添へ此際本會事務所へ宛御送金被下度候

●前金切れの御方は此際御送金被下度候也

本會の振替貯金口座番號一〇六〇〇番に付右番號を御承知の上所在の郵便局に於て該用紙御請取被下指定の欄内へ送金高、拂込人住所氏名、及び加入者住所氏名（即ち本會）等を記入し同時に金圓御拂込相成候はゞ直ちに本會へ送金無料にて相屆き且つ途中紛失及び盜難の憂ひも無之候又該用紙裏面に通信文欄有之候間他に用事ある節は何なりとも御記入差支無之候、右の如く拂込人に取りては安全、輕便、經濟等一擧にして種々の利益ある便法に付自今該法を御利用被下度此段會員諸姉に稟告致候也

○本誌には會員諸姉の御便宜を謀り特に振替貯金拂込用紙を添付致置候間御用ゐ被下度候

○爲替御送附の節は本會事務所宛にて麴町區富士見町郵便局へ御振出しを乞ふ

前髪心の覇王 美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衛生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺	中	貳匁四分
壹尺貳寸	大	三匁四分
壹尺五寸	極大	五匁五分



講演

疫病の話

ドクトル　富士川游

私は今日少しばかりの時間の間で、疫病と是まで云つて居るところの病に就て話を致さうと考へて居る。

一體世間の大抵の人は臆病で、火事でも、地震でも、雷でも、何んでも天變地異と云ふものを非常に畏れる、中にも此病氣は直ぐに生命に係はりますから、大抵の人が怖わがる、さうしてそれを恐れまして、どうか其病氣に罹りたくないと云ふ考は誰れしも起るのでありますけれども、病氣と云ふものは一體どう云ふものであるか、自分の體は一體どう云ふものであるかと云ふ事が能く解らないので、無暗に恐怖する傾がある。

此傳染病——疫病と云ひますのは昔の名前でありますが、それは其初を申すと能く其事が解る。疫病と云ふものは、一時に澤山の人が罹つて、瞬間に大勢の人が死にます爲に、無暗に恐れます、其恐れ工合が甚だ妙で、今其話を致して見たいと思ふ。我國では極く古い時から疫病と云ふ名前はあつたが、此の疫の字は近頃使ふ様になつたのであります。本は役病と云ふ字を使つて居りまして、我國の詞で「エヤミ」と云ふてます。今では税を金で出しますが、昔は税を金で出さないで人間の力で出す、それであるから年貢を收める場合には皆力役に出ます、それで此役に當つた如く大勢の人がハタ／＼病氣に罹りますから役病と云うて居ります。之は西洋風の言葉では何處の國でも國民の病と云ふて居る、さう云ふ

風に大勢の人間が罹つて行く、我國で「エヤミ」と言ふのは、人夫のやうに出るから役病と云ふのである此詞は鎌倉時代——今から七百年程前にさう云ふ文字を當てゝあつたので、流行病と大流行病と風土病との三通り、總て流行り病ですが、それが非常に流行ると大流行病となる、一時流行つて居るのを流行病と云つて居ります。恰度今から千四百年位前に我國の欽明天皇の十三年でありますが、朝鮮から我國にお釋迦樣の佛像が入つて來た。それを當時の蘇我の大臣稻目と云ふ人が崇め奉つたところが物部大連と中臣鎌子と云ふ人が、我國にはそれ〳〵神樣があるのであるから、異國から來た佛などを崇め奉つてはいかぬと云ふ議論であつた。其時恰度疫病が起つたので、是は何んでもお釋迦樣を崇め奉つたからであらうと云ふて、折角朝鮮から持つて參つた佛像を燒毀された。それから三十年敏達天皇の御世に又疫病が流行した、是は何んでも佛像を燒き棄てたりしてお釋迦樣に對して不敬な事があつたから起るのであらうと云つて、今度はそれを祀る事になつた、けれども病氣はお釋迦樣を輕蔑しても、尊敬しても矢張り流行する、大勢の人が三十年も立つたか立たない中に復た流行つて死ぬる、夫等の例を申すと色々でございますけれども、病氣は大抵三十年目とか五十年又百年立つと何時も流行つて來る。併し其流行り方は度の重なる程勢力も衰へるものである。それから二百年程立つて九州の方から豌豆瘡と云ふものが流行して來た、そしてそれが爲に多くの人が死んで、日本中の人は殆んど死んだ位に人間が餘計に死んだのであります、それで恰度其死方が、此當時の人の著て居る衣服は少し長くて何時でも地面を曳いて居る、其裳裾の地面を曳くが如く日本中に蔓延する、それで之を裳瘡とも呼んだのである。又片一方では實に此病氣が怖わくつて仕方がないから、此病氣に罹つたら山の中に家を建てまして其處に放つて仕舞う、それで恰度喪中のやうであるから喪瘡と云つて居る。是は疱瘡でありますが、其流行り方が非

常な勢で、日本國中の人が殆んど死ぬる位であつて、之を防ぐ爲には祈禱もする、お經も讀むと云ふやうに、色々な事をやつたが、矢張り三十年立ち、四十年立つと同じ勢で以て盛にやつて來る。それから後にもいろ〳〵名の付いた重い病氣が非常に流行した、今から考へれば何と云ふ譯であるか譯も分らぬやうな一心房と云ふ病氣などが流行しました、それから夾病と云ひまして外國から來た病と云ふことで、是は大變な勢で丁度今の「インフルエルザ」即ち流行性感冒である、此病氣は今から丁度八百年程前に流行したので、其時には日本國中の人は殆んど此病氣に罹らぬ者は無い位であつた。德川氏の時代になりましても矢張りさう云ふ風な事が澤山にある。其澤山にある中で、今申した──例へば一心房或は夾病とか云ふ風の病氣が非常に國內に流行して、見る〳〵うちに人間がハタ〳〵斃れると云ふ位に蔓延して、其爲にいろ〳〵な祈禱、禁厭等も出來ました。未ださう云ふ風な名前の付くいろ〳〵な病がありましたが、德川の時代になりましてからは、人間の智識も大分進んで參つたので、自然言ふ事も面白い、詳しいお話を一つ二つ致しますと、明和六年に感冒が流行した、それは因幡風と名付けて、一時隨分流行したのである。其次には安永五年に白木屋お駒と名付くる或淫婦の事柄を淨瑠璃集に作つたそれが東京で大變流行した、其時に流行した風をお駒風と云つて大變流行した。それから天明四年今から恰度百二三十年程前、谷風と云ふのが流行した、それは其當時力士で名高い、仙臺の者で谷風梶之助と云ふ有名な力士があつて、それが大變に相撲が强くつて、自分は迚も土俵の上では橫になることは無い、若し自分の臥たのを見やうと思つたら風を引いた時に見ろと威張つて、大變に廣言を吐いた、するといの一番に罹つたので、其時の人が谷風と言つた、是も矢張り流行感冒で、實に非常に流行したのであります。又其次には將軍が小金井に猪狩をされた、其時に風が流行つた、それを猪狩風と言つた。其次

には和蘭の方から――南の方から流行つて來た、之を薩摩風と言つたのであります。

其翌年に……年を取つた人は御承知でありませうが……其當時ねん〳〵ころ〳〵の子守歌が流行つて、(文化四年)其年に又非常に風が流行した、それを「ねんころ風」と言ふ。それから文政四年にタンボウ風と云ふ風が流行した、是はタンボサン〳〵〳〵さいさいと云ふ俗謠が流行つた、其時の風をタンボ風と稱したのであります。それから文政十年に津輕風と云ふのが流行した、其津輕風と云うのは、大名津輕侯が御輿に乘つて、それで以て將軍から御咎を受けられたので、仕損ずると輿に乘れると云ふ、自分で以て輿に乘ると云ふのは死ぬると云ふ意味に言做して其風を津輕風と云うたので、天保三年に琉球から使が來た、其後で風が流行つた、それが琉球風。安政元年に亞米利加風と云ふのが流行つた。以上は德川時代である、明治になりましても、度々疫病が流行つて、一二を除くの外皆國に無い所はない位であつた。而かも是より以後は、船が出入する每に起つて、其爲に多くの人が死ぬると云ふ實に慘憺たるものでありました、斯う云ふ風な疫病は數知れずありまして、西洋にも斯う云ふ例はあるのであります。德川時代の一番末、――文久二年に麻疹が流行つたので、其麻疹が流行つた時に隨分人間が恐れて騷ぐ時に、それに乘じて歌などが出て來た、今日はさう云ふものが遺つて居りませぬけれども、遺つてますと何の疫病が流行つた時にもあるのである、此病を防ぐには斯うすれば宜いとか、此病氣は大病になるとか云うて、病氣するより其前にもう怖れて居る、其恐れて居ります時に乘じてさう云ふものが出來る、隨分慘憺たるものでありました。

それで一體さう云ふ風な疫病と云ふものは同一の種類かと、斯う申しますと、是まで日本で疫病と申して居りましたものゝ中には腸窒扶斯、發疹窒扶斯、麻刺利亞、流行性感冒、赤痢、疱瘡、麻疹――斯う云ふ風な病氣がありまして、近頃になつて百斯篤と

云ふものもありますが、昔はさう云ふ病は無かつた。疱瘡や麻疹は昔から在つたので、今日の疫病の中で流行性感冒などは人から人に傳染して行く病氣でありますが、それが傳播すると殆んど防げなくなる。銘々自分で防ぐより仕方がない。昔の人は疱瘡や麻疹は最も恐るべきものと思つて居つたが、今は夫等は治療が進んで居るからさう怖るべきものでない。今日恐るべき疫病は普通何う云ふ風に起つて來るかと申すと、疫病の種類は澤山ありますが、チヤンと其起る工合が定つた型があるので、此型の極く著しいものは虎列刺であります、此虎列刺は何う云ふ風にして參るかと云ふと、（地圖を示す）是は亞細亞、亞弗利加、歐羅巴等——印度のガンジス河の兩岸此處に根本と云ふものがある、虎列刺の病氣の種があつて、此種が（此朱で書いたる通り）、斯う云ふ風な方向に四方に廻つて來る、此處に根源があつて此本が船で以てずつとやつて來た、（地圖を指す）是は日本でありますが、日本へ初て流行りましたのは文政五年であります。（圖を指す）此赤い筋の書いてある徑を來た、九州の處に入つて來た、二番目、三番目、四番目も此處から入つて來た、（是は何回でも流行を赤い線で以て示してある）此支那の廈門から斜になつて東の方へずつとやつて來ます、——つまり此虎列刺と云ふ病氣は、此本があつて四方に擴つて行く、其本は印度のガンジス河の兩岸で、百斯篤と云ふ病氣も此處に本があつて、さうして其毒が四方に船と人とで擴つて行く、又鼠と云ふ動物でも蔓延するのであります、斯う云ふ風な譯で増えるのは虎列刺、百斯篤、もう一つは流行性感冒即ち「インフルエンザ」と云ふやうな病氣である。此病は何う云ふ風にして擴がるかと云ふに、此病氣は實に早く、瞬間に世界に蔓延するかと云ふに、前に言つた通りの經路を取つて毒が人間に觸れて擴がつて來る、擴がるのに何うしても一ケ月とか二ケ月とかの間は懸る、公報を始終見えて居れば分るので、（圖を指す）虎列刺なり百斯篤なりが發生したと云ふ事が官報に

載ると、其發生してから或時日を經て日本なり何處なりに流行して來る、處が此「インフルエンザー」はさうは行かない、今此處で出來たかと思ふと瞬間にやつて來る。明治二十三年に我國で流行性感冒が流行した、其時の初は能く分りませぬでしたが、後から考へて見ると、恰度十二月に東京に入つて來た事が判然した、其時の感冒は二十二年の十月の末に露西亞の聖彼得堡に起つて、十二月の初にはもう伯林、維也納に來て、十二月の十六日に伊太利の羅馬に流行して、十二月の末に伊太利のマルタ島に流行つた。それからまた、明治九年頃に西比利亞の端に流行つた、ところが十月の末に聖彼得堡に出來た、十一月の二十二日には西比利亞の眞中の所に流行つた、すると明くる年の十二月でありましたが浦鹽斯德に流行したのであります。

斯う云ふ風に何萬哩かの間をずつと通りて來るが日が左程懸らない、是は明治二十二年でありますが、其後の分が一月に流行した、其時は全世界東半球も西半球にも蔓延した、それで今申した如く、一つ何處かに發生すると瞬く暇に方々に出來る、そしてそれが、一ヶ月二ヶ月の中には屹度全世界に流行する、斯う云ふ風な病氣は外には無い、であるから流行性感冒に罹るまいとした處で虎列刺とか或は百斯篤とか云ふ風に罹らないで仕舞ふと云ふ事は實際難ケしい事である、從つて斯う云ふ風な病氣は日本では何うかして流行させまいと考へて色々の手段を爲たのではあるが、何うもさう云ふ風にばつと世界中に蔓延するものであると、なか〳〵此病氣が流行らぬと云ふとは無理であります、さう云ふ流行性の病を流行らすまいと無駄に骨を折つた所で、所謂勞して效なしで是は流行しても仕方がありませぬ、自分々々に注意するより外に仕方がない、それから人間と人間とでなければ傳染しない傳染病――天然痘、其他大分ありますが、其患者の衣類なり、或は部屋に備えてある道具等に依つて傳染するものと、全く人間から人間に傳染するものと、人間鼠などで傳染す

るものと、人間以外の蟲が惡くつて起るのと三つありまして、……我々が疫病を恐れて、それ等を防ぐと云ふたところで虎列刺若しくは百斯篤などのやうなものでありましたならば、防ぎ方もありませうが、此流行性感冒と云ふやうなものは此分では一寸防ぐことは難ケしい。人間の體に接觸するのは是は防ぐ事が出來るのである、又實際さう云ふものを防ぐ法は大抵誰れも知つて居るが、其自分／＼個々の關係――自分で自分を唯考へると云ふばかりでなく、何うしてそれ等を豫防するかと云ふことがもう少し效があるので、今申したのは或物に觸れて起る場合で自分／＼で以て其病氣が怖わくつて防ぐことになりますと、病毒と云ふものが大きく眼に映るのであります。其毒が何處から入るか耳から入るか、又口から入るか、或は皮膚から入るかと云ふ、夫等の事を心得て置く必要がある。處が多くの傳染病は口です、でありますから普通の人の考では口から入ると斯う考へて居れば差支ない。口から入つて、其入つた毒が體の中で育つて、それから病氣が起きる、其病毒が入るには合圖がなく、何時口から入るか分らないやうに入るのであるから、醫者の方では、體に毒が入つて體の中で成長する日數を勘定する、是は素人の方も大體の事を御承知になる必要があるのである

(圖を示す)

一寸之を說明致しまするこ、疫病の是は重もなるものでありますが、病毒が體の中に入つて、それが體の中で以て或る所まで育つて、さうして病氣が起る。其病氣が起る、其間を醫者の方で潛伏期と申します。此潛伏期は、其病氣に依つて長短があるので、痲疹などは大分長いが、今申上げた百斯篤、斯う云ふ風の病氣になると皆早い、虎列刺、赤痢、腸窒扶斯なぞは長い、昔は此等の病氣は隨分怖るべきものとして居つたが、今日では恐るべき病氣ではありますけれども、さう怖るべき病氣でない、大體斯う云ふ風な事を知つて、いろ／＼の病氣を豫防するは、皆の注意に出るのであります、けれども今一人の人間が

病人に觸れたとすれば、其人間には毒が入つて居るものと見做して十日ばかり脇の方にやつて置くと、其間に病氣が出來る、それで檢疫法と云ふことがあつて、百斯篤などが流行る時分に船が入つて來ると、其船を五日なり一週間なり止めて置いて、其船の中の人を外へ出さないやうにする、さう云ふ風にするのは日本では大抵百斯篤とか虎列刺病とかさう云ふものでありますが、此潜伏期と云ふものは病氣に因つて種々ありますが、麻疹の人と接近さすと十一日目には分つて來る、さう云ふ風な場合に脇の方に隔離して置くと云ふことが必要で、自分の家族其他御老人でも此病氣と云ふ大體の事を識つて置きになる必要があると思ふ。

此疫病を今申上げたやうに、いろ／＼な時代に大變人が怖わがつた爲に、それ等の病氣に罹らないで仕舞ふ——病氣を防がうと云ふ事に就て、いろ／＼な考が湧いて來るのであります。今までの方々の國國の事を調べて見ましても、何んでも一番先きに禁厭で以て治癒し、又御禦で行かうとして居る、是は今でも能く在るのでありますが、「佐々良三八」「曾呂利新左衛門の子」「鎭西八郎爲朝の御宿」と云ふやうな非常に強い人達の名を書いて貼つて置く、斯う云ふ事はもと支那の古い時に、仙人と云ふ者があつて、其の仙人などが長生をして生延びる事だけを研究して居つたのである、其等の人が御符——赤靈符しと云ふやうなものを拵えた。斯う云ふ風な物を澤山拵えた。蘇民將來の子孫などゝ言ふのも此類である、是は古い畫などにも斯う云ふ事が書いてあります。

それからもう一つ序に御話して置きますが、蘇蘓と云ふ事が書いてある是は一體何う云ふ所以で斯う云ふ文字を書くのであるか、一向我々には何う云ふ事か容子が解らぬのでありますが、此の文字は東京の街を歩いて見ましても能く斯う云ふ風な三字が書いてあります。支那の話の中に、或る處に渡があつて、其處に或日坊さんが來て其渡を渡らうとすると、其後に黄色い衣服を來た人が五人ばかり小さい籠を脊

負つて行つて來る、而して坊さんを渡さうとすると、其坊さんが、彼の黃色の衣服を著た人々を渡せば後に必ず疫病があると言つて、それで斯う云ふ文字を書いて置いたと云ふので、其後の人がそれを禁厭として防ぐと云ふ、之は隨分古い話でありますけれども、今日まで斯う云ふ風に使つて居る、殊に痲疹など禁忌、疱瘡などの禁忌になつて居る。

又定めし諸君も毎年正月元旦に召上ることゝ思ひますが、屠蘇を祝ふのは矢張此疫病を拂ふが爲でありまして、文武天皇の四年正月初めて朝廷で儀式を行つた、其儀式を民間でも執つて屠蘇を飲んで居るのである、之は白朮、山椒、防風、肉桂などを入れて製するので、是は皆疫病を除くと云ふ爲に互に飲んで居るので、今申上げた、此藥を分析して見ても、毎年正月の元日に一杯や二杯飲んだのでは、迚も疫病を防げまいけれども、昔から斯う云ふ儀式なども皆さんがすると云ふことは、皆普通になつて居られた、此等も皆疫病を除く爲に始まつた儀式である。其次には氏神などの祭と云ふものがある、其祭が矢張り今でもある、六月の末、十二月の末、其外色々な祭があると云ふ譯と云ふものが皆此爲で、今でも方々で行つて居る、京都の御所で、除疫と云ふ式があつて、松に火を付つて其處で以て祭をする、又追儺と云ふのも矢張り疫病を除く方法であつて、今でも豆撒と云ふものを行つて居る。今日では儀式のやうになつて居りまして、殆ど譯の分らぬやうなものもある、是等は全く疫病を畏れて斯う云ふ方法が行はれるので、今でも處々に魚の頭が木に插して疫病除にして門口に突出してある、是は東京市中にも大分認められる、聖武天皇の時に疫病を起す神樣が來て、仕方がなくつて賄賂に魚を與へまして、魚の頭を串に插して賄賂に使つた、それからずつと今日までも遺つて居りまして、今に門の處に魚を串插しにしたり、又祭禮をしたり、禁厭をしたりして、いろ〱な事で以て之を防ぐと云ふことを考へて居る。斯くの如きは全く此疫病が怖はいからである。

通常の病氣なら兎も角も、慘憺たる烈しい病に罹れば皆死ぬると云ふ勢であるから、何うしても人間の力ではいけんと云ふ恐怖から起るのであります。今申上けたのはずつと古い話であるが、其古い時代のものが何時でも出て來るのでありまして、大流行病があると、さう云ふ風な事が出て來るのであります。

是は安政五年の虎列刺が流行した時は神祭をやつた――神樣の御機嫌を伺ひに京都でやりました時の式其容子を其當時版にしたので、是から後にも斯う云ふ事が起て來る、起て來るが、人間の智恵が漸々進むと行方は違ふ、違ふけれども怖いと云ふ點からさう云ふ風が起るのであります、併し幾ら金を出しても賄賂を使つても疫病神樣はお聽きにならぬ。明治の世の中にもあるのであるから、是から後にもさう云ふ事はあるだらうけれども、疫病と云ふものが、却てさう云ふ風な事で以て行くべきものでない。それならどうしたら疫病を除くことが出來るかと云ふに、何んでも疫病に罹つた其病人を他所に離すと云ふ事が出來ると一番宜いので、斯う云ふ風にすれば大抵十中八九までは傳染病は隔離され嚴重に出來れば、それで以て病氣を止める事が出來る。一人は犧牲になるのでありますけれども、其外の人間は助かる、でありますから傳染病を怖れるならば正確に患者を隔離すれば宜いので、それは昔でもそれは行つて居るので、先刻も一寸申上げた通り、我國に初て疱瘡が流行した時、未だ醫學の考もない時代であつても、其病人を山に捨てゝ交通をしなかつた、其行方は異るにしても紀伊の山などにも、又周防の岩國にもあつた。それ等は醫學の考もなくやつたのであらうけれども、さう云ふ風にすれば傳染病は立派に防げる。それから潜伏期の間は普通の者と異らないから、果して罹つたか罹らないか、潜伏期の間隔離して脇で看て監督さへすれば宜い、此二つの方法で以て確に行けるのでありますが、もつと人間の力を以て考へた行り方は、身體の血液を變らして其病氣に抗する

だけの血液にする、彼の實扶的利亞などの治療は此血液の作用に基いて出來て居るので、體の血液が變るやうに出來て居るのであります。血液を良くする事が出來て、隔離と潜伏期の監督とこの三ッが出來れば大抵の傳染病は大丈夫である。それで此疫病に感染する時期も、初ての流行は非常に强いのであるが、段々度を重ぬると少し弱くなる、虎列剌などの初は大變甚しいが流行が二回三回となると減衰して行くやうになつて來る。腸窒扶斯なども今日では殆ど恐るゝに足らぬ位なもので、麻疹なども初は非常に甚しかつたが、今では段々に其勢が弱くなつた。昔は疱瘡は容貌定め、麻疹は命定めと云ふた位で、隨分危險な病氣でありましたが、今日では此病氣は大概癒るから、常時の人は麻疹に早く罹る事を却て希望して居ると云ふ位である、さう云ふ風に全然治らないものも癒る、初强かつた傳染病も漸く弱くなり、又免疫法のやうなものが出來て、血液の性質をすつかり變えると云ふ事も出來るのであります。これで一人〳〵の疫病は一體何う云ふ風な考を有つて行れば大丈夫であるか――今日の醫學の仕方では疫病と云ふものは一體何うして鎮めるか――虎列剌、百斯篤の如きは船とか人間とか鼠或は蠅とか云ふやうな物に因つて媒介を爲して居るが「インフルエンザー」の如きは殆ど風の力で以て病毒が送込むと、僅かの間に擴がる、斯う云ふ風に擴がる徑と云ふものが定つて居るから夫等をチャンと知つて居りましたならば、それを豫防する能力を進めると云ふことは銘々個人の考で出來ると思ひます。急性傳染病潜伏期の間は、前に申した如く唯此病人の身體を絶えず能く脇の人が監督すれば宜い、其監督するより今のところでは別段に其病氣に對しまして慥に效能もあると云ふ藥も見へて居らぬのである、其病氣に體が耐ゆる方法を醫學の法で監督を致して居るのである、從つて早く見て貰へば癒り易い、其人の體が丈夫であれば治り易い。それからして其病氣を養生する、其養生の仕方が良ければ外の病氣にならな

い、此傳染病の時は體の不攝生なるものが非常に命に危險があるので、さうしてそれが何時か追々疫病と云ふものが急性傳染病となつて其病毒が人間の體を襲ふ爲に多くの人間が怖れますけれども、其恐るべき所以と云ふものか分らない、無暗に結果を見て恐るゝのでありまして、其やり方は何時でも間違つて居る今申上げた通りいろ〳〵な方法もいろ〳〵な藥品などゝ云ふものを考出しますけれども、總て本當の所に行つて居ない。

是れから後斯う云ふ風な病氣は隨分流行ると思ひます、此も用心までに御話して置きますが、個人名々の方針としては、何んでも傳染病と云ふものは口から入るものと考へて、飮食物を用ふるに注意をするので、それに適當なるものを用ゆれば少しも用ゐて差支ない、世間で流行病の話或は傳染病などが非常に慘憺たる有樣であると云ふ風な事が新聞の報告にありました爲に、非常に恐れて、食物も飮物も食はないで居ると云ふやうな人がある、其食はない爲に今度は非常に體に害を起して來る、精神が沈鬱して其爲に體が却つて惡くなつて、傳染病などが自分の方に襲つて來ると云ふやうな事が隨分ある。病氣は恐るべきものではあるが、其怖るべき所以が無ければ恐るべきものでない、萬一罹つた場合には仕方がない治療を能くし、攝生を良くすると云ふ事が肝要である、尤も人間が平素から健康でさへあれば、殆ど大丈夫であると云ふことだけは申上げて宜いのである。

今日は疫病と云ふものを人々が怖れて居るが、其恐れ方が意味の無い恐れ方であるから、意味の有る恐れ方をしなければいけぬ、それには唯今申上げたやうに、斯う云ふ風な事を御承知になつて、それを相當に應用すると云ふ事を極く少ない時間で、極く大體を御話したのでありますが、併し要點はそれだけで終ります。

叢談

健康と秋

急性の病氣でも、慢性の病氣でも、早く療治すれば、それだけ治癒る見込が多いと云ふことは、今日では素人と雖、皆承知して居ることである。

急性の病氣は、醫者でなくとも、大抵著しい病狀が現はれるから、兎に角これは重い病氣に罹つたのであると云ふことに氣が付く、從て直樣診察治療を受ける、例へば、チフテリとか又は急性の盲腸炎（蟲樣突起炎）などに罹れば、小兒は嗄音を枯らして、吠るやうな咳嗽をし、非常に苦しさうな呼吸をして、窒息しさうになるから、これは馬脾風ではないか、少なくとも容易ならぬ病氣であると氣が付き、醫者の許に驅付ける、急に右の横腹が痛んで、足を動かすことも出來ぬ、其部分を壓へても、普通の腹痛とは異つて、痛は輕くならず、反つて痛は増しなかく止まぬ、堪切れぬから直ちに醫師を招く、診斷は盲腸炎と云ふ譯で、速に夫々の治療が行屆く、從つて、流石の重患も比較的早く治癒すると云ふことは、經驗ある人の能く承知して居ることである。

所が慢性の疾患となると、これとは全く趣が異なる、慢性の疾患では、名の如く病氣は極めて徐々に現はれ、其の最初の症候と云ふものは、殆ど分からない、而して波の如くに僅か善くなつたり、又僅か惡くなつたりして居るが、やがて病人も自ら其の病氣なることに氣が付き、醫者には申迄もなく一定の病氣であると云ふ診斷のつく頃となつては、既に極度に病氣が進んだ時期である。

斯樣に極めて徐々に進んで行く所の病氣も數あるが中に、特に國民病とも云ふべき厄介な病氣が二つある。即ち肺結核と癌腫とである。此の二種の病に、其の原因と病態も非常に異なつて居るけれども何方

も其の始は極て緩慢で、殆ど氣付かぬ間に進んで行くと云ふ點は大に似て居るのである。

吾々は、今日では、未だ十分實行はされて居らぬけれども、結核の豫防法は承知して居る。又漸次衛生思想の普及と共に、豫防法が發達して來たけれども、何分此の病氣を初期の中に認めると云ふ點は未だなか／＼思はしく行かぬのである。それ故、一見詰らぬやうな事でも、肺結核を早く知ることが出來ると云ふ方法であれば、それは極めて衛生上大切な問題と云はなければならぬ。

それには、規則正しく體重を測ると云ふことも、第一に其方法に屬すべきものである。今日では少しく教育ある家庭に於ては、能く初生兒の體重を測つて、母親は、我兒の目方が一匁增しても、非常に喜んで之を書きつけて居るが少しく成長した子供に就ては全く無頓著になつて仕舞ふと云ふのは、衛生の注意上大に矛盾したことゝ云はねばならぬ。

實際これは大變な間違と云ふべきもので、體重と云ふものは、春氣發動期にこそ最も深い注意を要するのである。特に早く育つて、胸が狹くて、顏色が蒼白で貧血に見え、食の細い少年少女にありては、絕えず體重を測つて書留めて置きたいものである、さうすれば、其の原因は何であらうとも、徐々に身體を破す影響があれば、直ぐに分かるからして、その時には是非注意して且つ絕ず醫師の監督を受けることにすると云ふことになる。

規則正しく體重を測ると云ふことは、癌腫の疑ある際、就中消化器の癌腫の疑ある際には、更に一層大事なことである、一體胃や腸の癌腫の惡性であると云ふのは、――腫物を云ふのではない、腫物は外科手術に依て取除くことも出來る、それよりも此の病氣は、竊に、殆ど是ぞと云ふ症狀もなく始り、大した事もなく經過することである。それであるから、癌腫に罹つて居る病人が醫師の所に來る頃には、大抵餘程進んだ時期であるが、何うも能く此程になる迄平氣で、放置て置いたものだと思はれるが、さう

は云へない、何故ならば病人は自ら左程苦痛を感じない、加之ならず、多少悪かつたものが、一時反つて善くなつたやうな氣がすることさへあるからである。之に反して總て癌に罹つて居る人の大多數は、始から終りに至るまで、絶えず體重が引續き減つて行く、段々著しく減少して行くものである。

これは何れの醫師の經驗も一致して居ることであつて、規則正しく體重を量ると云ふことは、特に消化器の病氣に於ては、これまで一般の人が考へて居つたよりも餘程大切な事である。但し體重が段々減じて行くから、これは消化器に癌の出來た特徴であるかと云ふとこれはさうは云はれない、先づ疑はしいと云ふ所であつて、兎に角餘程氣を付けて始終醫師の診察と檢査とを受けることを怠つてはならぬ。

こゝに一つ注意をして置かねばならぬことは、體重の減少そのものは必ずしも病氣の徴と云ふものではないと云ふことである、例へば飲食物の量を減らすとか或は全く斷食するとか云ふ場合には、これは自分で行つても或は醫師の指圖に依つて行つても體重は減少する。それで獨逸邊では、平常盛に麥酒を飲むで居る者が、全く麥酒を飲むことを止めるとか或は著しく其の量を減らすと云ふと、忽ち體重が減少すると云ふことである。

併しこの食物の節減に由る所の體重減少と、病氣に因る所の體重減少との間には餘程著しい差があるもので、病氣に因るものは、體重が減少すると同時に、體力が衰へる、就中身體に疲勞を覺え、直ぐ休みたくなる、手足の筋肉の力も弱くなる、つまり全身衰弱の狀態を表はして來るものである、然るに飲食物の關係から來る所の體重の減少は、之に反して少しも身體の氣力にも能力にも故障を起さない、のみならず、病的に惡肥りして居る人に脱脂療法、即ち瘦せる方を施す時などには、體重が減つて反つて元氣が良くなるのである。

それで絶えず體重を測るに就て最も大切な點は、第一に、體重の減少は、從來の生活法その他の生活條

件に變化がないのに起つたものかどうか。
第二に、體重減少と共に體力も亦著しく衰へて來たかどうかと云ふことを確定することである。
此の二つの事が一致すると云ふことであれば、それは確かに身體に病的の故障がある、而して何ぞ消化器の方から來る病狀も現はるゝに於ては、疑もなく消化器に病氣があるので大分危なくなつて來ると云ふ譯である。併しこれを檢査して以て　この消化器病は重いものであるとか、輕いものであるとか云ふことを斷定するのは、一寸六ケしいことである。何故かと云ふに、その體重の減少を以て、固有の病氣の善惡に對して斷定を立てることが出來ない、殊に攝生法の如何に由て大變に相異が出來るからである。尙ほ吾々が合理的に、卽ちこれなれば人間の身體は持てる筈であるといふ理窟に當はめて、特に蛋白質と脂肪に富むで居る食物をやる際には、常に體重を測つて居れば、身體の具合が能く分かる。卽ち右のやうに特別に養生をして居れば、體重は增す筈である、少なくとも身重の減少するのが止まなければならぬ譯であるからである。
常にこの體重を測定すると云ふことは、吾々醫家に取ては極めて必要なことであつて、これを能く利用するならば、只患者から不確な訴へを聞くよりも、種々の點に於て餘程いろ〳〵の助を得ることが多いので、診斷、治療上殆ど缺く可からざる事柄になつて居るのである。
體重測定の意味は、單に問題となつて居る所の病氣を認めるに必要なばかりでなく、その病氣が進んで來るか、停止つたか、又消退て行くかと云ふことを見定める上に必要である。卽ち適當の療治をして居つて、段々體重が增して來るならば、これは經過が良い、そろ〳〵癒つて來るであらうと云ふ見込がつく、之と反對に何うしても漸々體重が減つて來ると云ふならば、望が少ないと云ふことになる。と云ふても、これは普通の場合であつて、何時でもさうばかりは云へない、何故ならば、體重の增加と體力の

増加とは必ずしも一致するものではない、反對のこともある、例へば脂肪病などゝ云ふやうに、異常に體に脂肪が附いて居る者に對しては、誰も知つて居る通り、體重を減らすことが、先づ第一の目的になつて來るのである。

斯樣な譯で、病院とか養生園とか、凡てさう云ふ所に於ては、規則正しく體重を測ると云ふことは、健康狀態を監視する上に於ては、缺くべからざるものになつて居るが、この大切な方法の廣く一般に用ひられて居らぬのは殘念なことである、殊に大都會に於ては是非必要の事と思ふが、遺憾ながら一向行はれて居らぬ。それで病人が醫者の診察を受けに來て自分の體重を知つて居る人は甚だ稀である、況んや病氣になつてから、何の位體重が減つたか、又殖えたかに至ては分からない、唯何うか減つたやうな氣がすると云ふ位で、それはとても當てにならぬ話である。

今日では、大抵病氣の未だ甚しくならぬ始に比較的早く醫者の診察を受けるやうにはなつて來たが、二三回體重を測つて見て、それが何ぞ身體の故障と關係がありさうだとか、作業能力と關係があるやうだとか云ふことに氣がつくやうになつたならば、一層早く醫者を訪ふやうになるであらうと思ふ。

これを改革し普通せしむるのには、どうしても一般に誰でも便利に安く自分の體重を測り得る方法を講ずるに限ると思ふ。それには先づ價値のある、固定せる仕掛で、而かも信用の出來る秤を段々多く備附けるやうにしなければなるまいと思ふが、何ほ一般の家庭に於て、衞生的設備品として之を備へるやうにしたいものである。今日では室内の裝飾とか何とか云ふて、種々の贅澤品が段々多くなるが、其中には一つ位これ程有益な物を混せても決して不都合はなからうと思ふのである。簡單に云へば、何れの家庭に於ても、特に工場のやうな所に於ては、良好にして持の宜いデチマール秤を備附けて置いて、誰でも無料で以て何時でも自分の體重を測ることの出來

るやうにしなければならぬ。又これと同樣に、方々の公衆の場所に正確な秤を置いて、何人でも隨意に無料で測ることの出來るやうにしたいものである。從來公園のやうな所に稀に備附けてある不正確な自働體量器では駄目である。且つ何れの秤にも、通常の人は何程の體重があるものか、又何れだけの年齡何れだけの身長の人は、何れだけの體重あるべきものかと云ふことを精密に表はして置かなければならぬ。

この新提議に對しても、種々の小さな困難はあらうけれども、それは、斯樣に規則正しく體重を測ることが、何の位人民の仕合せとなるか、又何の位その健康と關係して居るかと云ふことが分かれば、些細の故障は容易に打勝つことが出來やうと思ふ。

疾病を防がうと云ふ考は、段々普通教育の普及の御陰で大分一般の人民の間にも盛になつて來たが、これと共に、結核とか癌腫とか云ふやうな大きな國民病をその初期に認めるやうになると云ふことも極めて必要なる事である。それには、尤も唯一の方法と云ふことは出來ない、又餘り買被つてもいけないが、精密に自分の體重を測ると云ふことも、確かに有力なる一法であると思ふのである。

耳の攝生

醫學士　神尾友修

耳の養生法を知るにはまづ一通耳の構造を御話しせねばなりません。

耳は頭の兩側について居る孔でありまして、一つの官能をもつて居ります、一つは誰も知つて居ります所の音聲をきくといふ官能で、一つは身體が立つて居ても倒れぬ樣に身體の平衡を保つて行く官能であります、耳が病氣になる時は聽えが遠くなると同時に時とすると眩暈が起つて立つ事や歩行する事が來なくなるのは此の爲めであります。

耳の孔を外から覗きますと、孔の突當りに吉野紙の

やうな薄い膜があります、之れを鼓膜と申します、此の膜は少し内方に凹んでは居りますが、丁度太鼓の皮を張つたやうな有様で、内と外との境を立てゝ居る障子となつて居るのであります、此の障子の外は單に一つの孔でありますが、鼓膜の内側には種々の複雜な構造をもつて居ります。此の鼓膜の外にある總てを外耳と稱へ、内にある部を中耳と申します、そして、外耳の中でも通常耳の孔と稱へて居る部は外聽道と申します。

中耳は鼓膜の内側にある小さな室でありまして、四面皆骨で圍まれて、中には三個の小さな骨をもつて居ります、そして細い歐氏管と申す管をもつて咽腔の方へ續いて居ります、此の中耳内には常に空氣がありまして、其の空氣は歐氏管により外の空氣の交通して居ります、嚔、咳などの時に、耳がパーと塞がつた樣な氣になるのは、空氣が多量に中耳の中にはいつた爲めであります。

耳は外耳と中耳とばかりより出來て居るものでありません、其の内側には更に内耳と申す所があります、此所が卽ち音を聽き、または身體の運動、位置等の關係を知る所でありまして、外耳中耳は唯音を内耳迄傳ふる器官であります。それ故外耳、中耳が病氣しても、鼓膜がなくなつても、全く聽えない。所の聾になるものではありません、聽えが甚しくわるくなる事がありましても、少しは聽えるのであります、併し内耳が病氣になる時は、いくら高い音でも聞く事の出來ない聾となるのであります。

種々の病氣の爲め耳が遠くなれば、音樂を聞いて樂しむ事も出來なく、演劇を見ても面白くなくなります、それに日常の談話も意に任せませんから、意思を交換して人と交際する事も出來なければ、從つて社會から遠ざからねばならなくなります、そして社會から捨てられ、不幸な人は、人の談話や何かゞ自分の批評でもするかの樣に氣取られ、だん〳〵と人を怨み、世をうらみ、遂に社會から捨てられた身は自ら社會を捨て、世をはかなみ、悲しき一生を送ら

ねばならないのであります、耳の聽えぬ人の氣の毒な事は決して盲人に劣りはせぬのであります。

世にはまた耳鳴で苦しむ人が少くありません、之れは世の中は至極靜かな時にも、絶えず何か音聲が聽えてくるので、中耳、內耳の病氣に來る一つの徵候であります、其音は或は松風のやうなのもあります、或は蚊軍のなく音、暴風怒濤の如き聲、河の流のやうな音、或は半鐘を打つ樣な騷がしい音など人によりまた病氣により種々であります、其のやかましい、うるさい事は何れも同一でありまして、寢ても覺めても此のうるさい音に邪魔をされるものでありますから、耳鳴のある人は四六時中安息する事が出來ません、睡眠も妨げられ、おちついて考ふる事も出來なくなり、神經衰弱を起し、甚しいものは之れが爲めに發狂するものさへあるそうであります、また耳鳴で苦しむ程ならばといつて自殺した人もあります耳鳴はまた耳の病氣がなくても起る事があります、即ち神經性耳鳴と申しまして、神經衰弱や「ヒステリー」等の病氣に罹つて居る人に、神經で起る事があります、また鼻や咽腔の病氣の爲めに起り、それを治療してなほる事もあります、また藥を服用した爲めに起る事もあります。が、それは藥のきゝめが消えると共になほります、熱帶地方、臺灣などに旅行した人は「マラリア」の豫防にキニーネと申します藥を用ゐますが、此れは耳鳴りを起すものでありまして、此の藥を續いて服用致します時には、耳鳴りも長く繼續致しましてなほらない樣になる事があります。

前に申しました通り耳は外、中、內の三部分に分れて居るのでありまして、其各部分に起る病氣の數は甚だ多數で、殆ど枚擧するに遑のない程でありますが、其內で最も普通にある、最も多い病氣は中耳炎であります、之れは聽えをわるくするばかりでなく、屢ゝ生命を奪ふ事のある恐るべき病氣であります、通俗に「みゝだれ」(耳漏)と申しますのは即ち中耳炎の一つの徵候であります。

通俗に耳から「みゝだれ」と申して居ります病氣は、何でも耳から膿汁が出るものを總稱したものであります、でありますから、其中の多くは中耳炎でありますが、中には鼓膜丈けの病氣、或は外聽道丈けの病氣でも、膿汁が耳の孔から流れ出るものを總稱したのであります。

中耳炎とは鼓膜の內側卽ち中耳に膿をもつ病氣でありまして、始め三四日間は非常に痛み、爲めに一睡も出來ない事があります、其の痛みは耳ばかりでなく、頭の方にも、齒の方にも傳はるのであります、耳の痛みと同時に熱も高くなります、そして凡そ三日乃至七日位の間に耳から液汁が出て來ます、卽ち耳漏が始まるのであります、之れは薄い鼓膜が中耳の中の膿汁の爲めに破らるゝので、其の鼓膜の孔から中耳內の膿汁が流れ出すのであります。

中耳炎は極く初期から完全なる治療さへすれば、耳漏を起さないうちになほる事も出來ます、鼓膜に孔が出來て、膿汁が流れ出した後でも、治療の方法さへ誤らなければ、膿もとまり、鼓膜の孔も塞がり、聽えも遠くならずにすむものであります、通常中耳炎が全治するに要する時期は二週間乃至四週間であります。

併し治療を怠るか、或は治療の方法が宜しきを得ないか、或はまた、治療は完全でも身體の弱い人、衰弱した人などには耳漏は長くなほらずに殘留して、鼓膜の孔は漸々に大きくなり、卽ち慢性中耳炎と申すものになります。然る時は三月も五月も或は五年も十年も「みゝだれ」が續きまして、鼓膜は殆ど全部なくなり、聽えも非常に遠くなりまして、到底恢復が出來ぬ樣になります。

若しまた、中耳の膿汁が充分に流れ出る事が出來ないで、長く溜つて居ります時は、膿汁は中の方に流れ込んで、耳の後の骨の中に達し、それより骨を破つて外に出る事もあります、或は耳の下の方に破れて頸迄も腫れる事があります、或はまた更に中の方に進みますれば內耳を破壞して眩暈を起したり、胸

が惡るくなつて、食物を吐いたりする樣な事もあります、就中最も恐るべきは膿が骨を破つて中に進み腦膜炎や、腦炎を起す事がある事で、斯樣な病氣が起つたならば、到底人の力では救ふ事の出來ないものであります、所が腦髓と中耳とは薄い骨一枚で界して居るものでありますから、中耳内に膿汁が溜ると、意外に早く、意外に容易く膿汁が腦髓に達し得るものであります、それ故人間の體の凡ての病氣の中でも、中耳炎は最も危險な病氣の一つと見做されて居るのであります、我國では昔から耳漏を輕視する習慣がありまして、殊に小兒では體の毒が流れ出るのだから、之れを療治すると外の病氣を起すものであるなどゝ、甚しく誤まつた考をもつて居りました、誠に恐るべき事であります。

小兒殊に哺乳兒の中耳炎は成人の中耳炎に比較しまして、更に恐るべき病氣であります、哺乳兒の中耳炎が何故殊に恐ろしいかと申しますに、それには種種の理由がありますが、要するに其の骨がまだ軟かで薄い爲めに、中耳の膿汁が容易く腦髓に達し腦膜炎を起す事であります、哺乳兒に腦膜炎の多い原因は、一は之の爲めでありませう。

生れたばかりの子供には中耳炎は非常に多い病氣であります、初生兒が死したる後解剖して檢査して見る時は、十中八、九分は中耳炎に罹つて居ります、殊に瘦せ衰いた哺乳兒、氣管枝炎、肺炎等で死亡した乳兒は大抵中耳炎に罹つて居ります、それ故或る人は初生兒は總て中耳炎に罹つて居るもので、却てそれが常態であるなどゝ申した人があります、併しそれは誤謬で、中耳炎は假令初生兒でも病氣であります、而かも非常に恐るべき病氣なのであります。

死したる子供を解剖して見る時は中耳炎に罹つて居るものが多いが、生きた初生兒が「みゝだれ」に罹つて居るのは左程多いものでありません、之れは初生兒の中耳炎は鼓膜を破つて耳漏を起す事が遲いもので、まだ「みゝだれ」が起らぬ中に膿が深い所にはいつて種々の重い病氣を起すからであります、そして

通常の醫者にはそれ等の病氣が中耳炎から來て居る事を發見する事が困難なのであります。

哺乳兒は痛いといふ事が出來ませんから、中耳炎の爲め耳が痛んでも唯だ啼くばかりであります、それ故其の泣く原因は耳にあるのか、腹にあるのかわかりません、熱が高いものであるから、小供の母は先づ小兒科醫に見て貰ひます、すると醫者は腸が惡いとか、胃がわるいとか申しまして、其の療治をして下さいます、併し病氣は耳にあるのだからそれではなほりません、小供は晝といはず夜といはず、始終むつかりまして、すぐ大きな聲をあげてなき出します、そして三日か四日の中に耳から膿汁が流れて出ると、熱もなくなり、小供の機嫌もなほり、泣くのも止むものであります、斯樣に三四日で耳漏が起るのは幸福なので、一週間も十日も、或は二十日も鼓膜が破れず、耳漏が起らなかつた時には、哺乳兒はやせ衰へて何の病氣かわからんで死んでしまふのであります。

哺乳兒の中耳炎は其の榮養を害する事甚しいものでありまして、發育の良い小兒でも一度中耳炎に罹る時は、乳を飲む量が少くなり、四五日の中に急にやせるものであります、それに、中耳の膿は歐氏管を傳はりて咽に入り嚥み下さるゝものでありますから、其の爲めに胃を害し、腸をわるくし、消化不良症を起します、甚しいものになりますれば強い下痢を發して死する事があります。

私はコンラに似た嘔吐と下痢とを起した小供が耳の療治でなほつた事を經驗した事がありますが、西洋でもそういふ事があるといふて居ります。

で、獨逸のゴムペルツといふ人は哺乳兒の中耳炎をよく研究した人でありますが、哺乳兒は耳の痛みを訴へる事が出來ないもので、且つ哺乳兒の中耳炎は種々の症狀を呈するものでありますから、哺乳兒が熱のある病氣に罹つたり、又は胃腸をわるくした時には必ず耳の檢査をしなければならないと申して居ります、之れは小兒の成育に心がくる人々の常に忘

るべからざる金言であります。

哺乳兒の中耳炎はまた腸チフスの樣な經過を取る事があります、私の見た人は生れて九ヶ月目の小供で一月も前から毎日卅八度乃至四十度の高熱がありましてある、所へ入院し腸チフスだらうといふので種種研究して戴いたのだそうですが、如何しても病原がわからなかつたのであります、ある日私が偶然其の耳を檢査しました所が、中耳炎のあるのを發見しまして、直ぐ鼓膜を切つて膿を出しました、然るに其翌日から病氣はずん／＼よくなり、熱も下りまして、七日後には平熱となり退院致しました。

また或る小供は肺炎ではないかといふて一ヶ月も入院治療して居りましたが、熱は去らず、咳嗽もなくならずに困つて居りました、それが鼓膜を切つて膿を出してから僅々數日の中に病氣がなほつた事もあります。

斯樣な事もありますから、哺乳兒の病氣には耳の檢査をする事は非常に必要なのであります。（以下次號）

化學者は木材より何を造るか（承前）

醫學士 藥學士　高橋學而

その七　木精一名メチルアルコホル

メチルアルコールは、木醋のうちに、平均一乃至二%位含まれて居つて、醋酸に較べては含量少く、從つて收利も僅かな譯ですが、併し方法と裝置とを適當に案梅すれば、矢張り工業として收支償ふそうです。

此外に木材に特別の化學作用を施して、直接にメチルアルコホルを作る法もございまして、唯メチル許りを目的とすれば此方が却て收獲が多いと申します

純粹のメチルアルコホルは、普通のアルコホル、即ち化學者の所謂エチルアルコホル（或は酒精とも云ふ）と、頗る類似した無色の液體であつて、其臭でも、味でも、又は之を飲むと醉ふ具合でも、殆ど唯のアルコホルと相違がございません。又之に點火すれ

ば、矢張り微青色の焔をあげて、アルコホルと同様に盡く燃えてしまいます

實際木材の乾餾、又は他の法で、工業的に造つた者には種々な不純物が含まれて居つて、其爲に味もわるく、特に大變不快な匂が致しますから、迚も飲む氣にはなれません。のめない所ではなく、普通のアルコホルに混和して、飲めないアルコホル、卽ち所謂變性アルコホルを作るのに、この不純メチルアルコホルを用ひる位の者なんです。

なぜ折角に良いエチルアルコホルに、わざ〳〵不純のメチルアルコホルを加へて、之を變性するかと申すと、之には次の様な理由がある。

現今世界の文明國で、（日本も同様）普通のアルコホルを需用する量は、實に夥しいと云ふも愚かな程である、併も、其大部分は酒精飲料――平たく申せば酒類の中に含まれて居るので、小部分丈け卽ち全量の約一二%を、化學工業に使用するのですが、夫れにしてもまだ非常に澤山な事なんです。

そこで酒類は、人民が成丈け飲まぬ様にと、政府からも之に莫大の税を掛けて、啻米麥を醱酵させて作つた酒許りでなく、どんな風に製造したアルコホルであつても、苟も飲料に供し得る者とあれば、此苛酷な税を脱れる事は出來ない。

明治四十年頃の大藏省の報告に依りますと、全國の日本酒の釀造高は約四百萬石、其税が一石二十圓づゝで締て八千萬圓の巨額に上つて居ります。日本酒中の酒精含料を約一八%として、此アルコホルは總量は七、八十萬石許りに成るのです。麥酒、葡萄酒の製造高は遙かに少ないが、夫でも矢張り其内アルコホルの含量に從つて、相當の税が課してあるのは上説の通りです。

●夫れで、飲料アルコホルも、亦一ポンド（約二合五勺）三十錢宛の税を取る。併し工業上の事になりますと、成べく原料を廉くしてやらなければ、該工業が發達しない、從つて國益が增進しない譯ですから、工業用のアルコホルには税をかけないのが原則とし

ております。けれ共又税を賦課しなければ世人が高い酒類よりも、その廉いアルコホルを買つて飲む。(之は一ポンド約十四五錢)、夫れでは第一、酒を飲ませまいといふ人道上、彝倫上の目的にもちがひ、第二には脱税者、即ち法律上の犯罪者を自然と増加させ、第三には政府の主要な財源の一つが追々涸渇するといふ結果にも立到りますから、そこで、工業用には適するけれ共、飲む事は迚も出來ない所謂變性アルコホルと云ふ者を作る必要が出て參りのです。即ち普通のアルコホル九十分　、臭いメチルアルコホル、云ひかへれば不純な木精の十分と猶少量の悪臭を持つた物質とを混ぜた者が、上に申す變性エチルアルコホルで、斯様にした者は、多くの工業上の目的には、純粹の者と同様の役目を致しますが、併し之を再び精製して、飲める様にするには、多分の費用がかゝつて却つて、初めから税を拂ふ方が、遙か廉いといふ具合なんです。

酒の問題については、個人も、社會も、政府も、學者も、教育家も、宗教家も、何れも一様に非常に當惑を極めて居るのです。之れは家庭内の主婦對良人の問題許りではなく、人類全體の運命の係はる至大至重の事件です。此事に關しては、追つて良い機會に少々卑見を本紙上にのべて見ませう。

その八　木精の用途

メチルアルコールもエチルと同様に、工業的の需用が極めて多い。そうして亦此目的には、多少の不純物を含んだ者、即ち木材から取つたまゝの不純な木精で差支がない。尤も酒精と木精との性質が肖て居るから、從つて其用途も大部分は互に代りを勤め得られる者で、特に税のないエチルアルコホルは、メチルに較べて價格も低廉であるし、旁々多くの場合には、危險の多い木精をば、使はない様にする事も出來る話ですが、併し次に申す若干の場合には、どうもその使用を止める譯にも行きかねるのです。まづ最も普通に木精を使ふのが、消毒用の所謂フォ

ルマリンランプです。之れは大凡普通のアルコホルランプと類似した器具であつて、之に少々の仕掛を食付けて、且其燃料としてメチルアルコホルを用ひる。そうしますと、このメチルが燃える時に、上の仕掛の作用で、フォルマリン蒸氣と云ふ者を化成して、之が次第に、其ランプの燃えて居る室内に充滿すれば、殆ど完全に其部屋を消毒すると云ふ斷定です。

我國の輸出物は、絹絲を以て其最大宗とする、田舍の方では全國到る處、多少其蠶を育はない所は殆どありません。一度蠶をかひますと、蠶室内は種々雜多な汚物や、腐敗物や、黴菌の爲めにひどく汚されて、引つゞいて蠶をかふにも、又は人が住まふにも、一度消毒をしなければ思はしくない結果が屡生じます。

この消毒に例のフォルマリンランプを使ふので、東京の人は却て知らなくつて、田舍の人がよく知つて居る文明の利器の一つです。

其外種々の場合の、樣々な物を消毒する目的に、此ランプが極めて廣く使用せられる。又同一の原理を應用して、別に工業的に作つたフォルマリンを、消毒乃至は他の目的に使用する量も尠くはありません

第二の木精の用途は、所謂溶媒として之を用ゐる事である。假漆、タール、セルロイド、香油、香料などを溶かすのに、どうも酒精では具合が惡くつて、木精だと大變都合よく行くと云ふ場合がございます

第三には上に申したアルコホルの變性に使ふ事です

第四には、メチルアルコホルを種々の藥品、例へばクロロホルム、ヨードフォルム又は有機性色素などの製造の原料にする。尤も此場合は多くはエチルアルコホルを以て其代用品とする事が出來る方です

明治四十四年に、外國から輸入せられた木精は、全量凡そ二千萬斤、内地で製造せられました高も、略之に近い程であるが、但し木精の需要は、年一年と非常な勢を以て增加して行く有樣です。

その九　木精の害毒

メチルアルコホルの使い道と、其需要高とは、右の通り廣く、且夥しく、又其價格もエチルアルコホヲ（一ポンドに付き税共に四十二三錢）に較べると、（一ポンドに付き税共三十五六錢）税共では大部廉い樣ですが、併し此處にどうも相成べく、之を使はない方が良いといふ理由があるのです。

夫れはメチルアルコホルが極めて毒性が強いと云ふ事である。

一體昔のメチルは、臭くて迚も飲めない者であつたが、近來化學工業の發達につれて、殆ど全く純粹な木精を廉價に製出する樣になつた。純粹な木精は、香も味も殆ど普通のアルコホルと違はない、その上のめばほゞ同じ樣に醉ふ醉へば――よはなくても、ごく少し飲んでも、又は其蒸氣を空氣と共に吸入しても、隨分烈しい中毒症狀をひき起す。一口に申せば慨くて月がつぶれ、重い場合には一兩日で生命を取られて仕舞ふのです、委しい事は五月頃の本誌に出て居つた樣ですから、就て御覽になれば御わかりになりますでしやう。

か程恐るべき毒物を、工業上に使ふ丈けでも隨分危險であるが（蒸氣吸入!!――木精の沸騰點は六十六度）更に悲慘な事は、其價が比較的低廉な爲めに、無智の賤民がわざ〳〵、之を飲んだり、又甚しいのは奸商が之を用ひて混成酒を作つたりしますと、其害毒の及ぶ所は實に想像にも及ばない位です。

か樣な實例は諸外國で之迄甚しば〳〵繰返へされました。日本でも此春の頃に、二三の木精僞造酒中毒の件があつて、夫から追々調査して見ましたら、此種の毒惡水が既に殆ど全國到る所に擴がつて居ると申す事です。奸商の奸惡は固より惡みても猶餘りある程ですが、酒の好きな銘々も、此事には非常な注意を拂はなければならんでしやう。尤も去る五月二十八日に、内務省から、木精取締規則が發布せられましたから、餘程の所までは危險も豫防し得るだらうと思はれます。

因に申す。我國で木材を乾溜して、之から醋酸

竝びに木精を採取する爲に下野、静岡縣、樺太等に醋酸會社が出來たのは、つい數年前の事柄です。

その十　有用植物

有用植物又は人生に密接の關係ある植物を類別しますと、(一)農業植物。(二)果樹及び園藝植物、(三)藥用植物、(四)山林植物、(五)工業植物の諸屬になります。

上に申した肉桂樹、規那樹などは藥用植物であつて、漆の樹、護謨の樹は、工業植物、山毛欅は、山林植物とも見られるし、又は藥用植物にも數える事もできる者です。夫れから、テレビンを作るから松、樟腦を取る樟樹などは、その使ひ道に依つて工業植物、山林植物、藥用植物の何れへも列する事ができませう。

最大規模に山林を形成して、其種類も多く、需用額も用途も極めて宏大な者は、山林植物中の喬木(若くは灌木)である。之が主に建築土木用、器具用、薪炭用に使はれる者であつて、木精又は木醋なども主として之から作るのです。勿論外の部類の植物でも、建築材料にも燃料にも、使へない事はないのですが、之等は各其みち〳〵に利用した方が、人世に貢獻する所が遙かに多いです。

以上に述べました化學的産物の外に、まだ紙、綿火藥、セルロイド、人造絹などは何れも普通の木材(山林植物)から作り得る者で、其需要額も極めて多く、又人生、殊に婦人方の家庭に緣の近い者ですから、序に申上げ度いと考へて居りましたが、餘り長くなるから一とまづ之で筆を止めます。何れ之等も亦其内に、好機を以て御耳に入れる事と致しませう。

醫術と迷信（承前）

石橋臥波

三、一般に關するもの

すべての病氣は、神佛に祈願する時は平癒する、少

なくとも病氣が輕快になると考へるのは、都會でも田舍でも、中流以下の社會では同じことである、そこで、病人があると、醫者に賴むより先に、神や佛に賴む、その方法には病人自身が心の中で祈願するのもあれば、家族のものが、自家の佛壇、神棚に向つて祈願するものもあり、神官、修驗者を賴むのもあり、神社や佛閣に參拜するのもある、又、般若心經を誦讀するのもあれば、五百度、一千度詣りといつて、神社の鳥居の處から、神殿の前まで多數の人が、榊の葉を數取りにして詣るのもある、一七日の祈禱をして、結願の當日の神のお告によつて、病氣の輕くなるか、重くなるか、病人の生命が如何なるかを卜ふのもある。

かやうな有樣であるから、東京などでも、長い間の病人になると、親戚知己の人々から、某神社の祈禱札、お守りなどと澤山病家に贈る、病家では、それを病人の牀蓐の下に入れてやるので、後には、これらの祈禱札や、お守りで滿ちてしまうといふことである、田舍とても、少し信仰家の家族に病人でもあらうものなら、所々方々の神社佛閣の祈禱札が、神棚から病人の寢て居る天井の裏に一面になる。

名高い、神社佛閣では祈禱札を出さないところはなく、加持祈禱をせない所はないが、中にも、備中の吉備津神社には一種妙な祈禱が行はれて居る、その地方では病人があると、この社に參詣して、その病氣の如何をうかゞふのである、この社にお釜の御殿といふのがあつて、病氣の輕重をうかゞふには、之を阿伽女に請ふのである、阿伽女といふのは、この神に奉仕する巫女で、この女が、柴を竈に燒いて、供米を篩に入れて、お釜の湯氣の上にかざす、すると、暫らくして、そのお釜が鳴り出す、その鳴る響の大小、高低によつて、この病人は漸次快方に赴くとか、生命が危いとかいふことを判斷するのである、いひ傳へるところによると、昔、吉備津彥命が、百濟の王子溫羅を誅せられた時に、溫羅の首が刎ねられても尙顏色が變せず、恰も生きて居るやうであつ

たのを、竈の下に埋めたが、叫ぶ聲が今も止まず、釜鳴の音は、即ちその聲であるといふのである。その他色々のものもあるが、一々擧げることをせず、これから、各病氣によつて、如何なる迷信が行はれて居るかといふことを述べてみよう。

四、腦、神經等に關するもの（二）

睡眠不足や感冒その他の原因から、ふと頭痛が發することがある、その發する前に家から他に出かけて往つたことがある場合などには、方位の凶なるために（暗劍殺の方、など）凶暴の神に往き合つて、ために頭痛が發したのであるとして、白米を白紙に包み、室内の高所にかけるか、又は、道路の傍の木の枝、若しくは峠の木の枝などに吊り下げる風習が中國地方に行はれて居る。この白米を神に捧げるのは、恐らく、古代旅行の時に幣を神に手向けた遺風であらう。

天狗につかまれるといふことは、何れの地方でも行はれて居る一つの俗信であるが、現に予が知つて居る家に、この例がある。天性愚鈍の一老爺、かつて、天狗につかまれて、その家の向ひなる山の頂上に捨てられたことがあつたが、それから後は、一層馬鹿のやうになつてしまつた。その言語は極めて早口で、意味が聞き取れかぬる程であつたが、しかし、常に修驗道を信じて、大和の葛城山にも參詣したことがある位で、人から頼まれる祈禱をして、失物や病氣のことなど判斷をした。その孫の、高等小學の二年生の男子が、ふとしたことで、白痴のやうになつて、遂に精神病者となり、今も現に生存して居るが、亦く癡呆性の精神病者である、その父親は、それとも知らず、神官や、修驗者などに頼んで加持、祈禱をしてもらつて、遂に、居宅の構造が凶なるために、かくなつたのであるといふので、よく〱居宅の一部を改築したが、病氣は、固より治癒すべき筈はない、依然として精神病者である。これは遺傳性のものであることは、明かである。

（つゞく）

美的體育の自然的基礎（承前）

ドクトル　エフ、アー、シユミツト原著

銀海漁史抄譯

一、直立したる人類の自然的運動形式

斯の如くにして、眞直に立た人類は、その烈しき生存競爭に由て、濶歩することが出來、疾驅することが出來、跳躍することが出來、登攀に依て萬般の自然的障礙に打勝つことの出來る身體的適能を得た。扛げること、擔ふこと、引くことに由て荷物を持扱ふことが出來、肩の自由なることは、攻擊にもあれ、防禦にもあれ、臂を以て遠く物を拋ることが出來る。その手の器用なることは又物を擊たり投たり、切たり刺たり、打延べたり引伐つたりすることの出來る道具や有力の武器を作らしめた。然れば此等の衝動は、著しく腦皮質の運動中樞の發達を促し、これに就で更に優秀なる智慧を獲て來たのであるが、これを詳しく論することは、こゝには餘分に亙る。けれども、兎に角凡て彼の自然的運動は、人類發達の經過中に、人間の身體を拵へ且つその形を成さしめた所のものであると云ふことが出來る。この運動法の習熟鍛錬こそは又各個に發達した所の個人の身體を、一定條件の下に、その外部の生活要約に應じて完成の極度にまで造り上げしめた所のものである。故にこの自然的操練法は、人間種族の古きが如く古きもので、最も發達したものと稱せらるゝ彼希臘の體操法（ギムナスチツク）もつまりは此自然的運動法の發達したものに外ならぬのである

育兒

乳房の疾患と授乳

醫學士　井上吉之助

母親が其小兒に哺乳をして居るに當り其乳房に種々

の障碍や疾病の起る事がある。其れには不注意から起る事もあるしまた、十分氣を付て居るに拘はらず疾患を免かれない事もある、何れにせよ常に豫防的の注意はしてゐなければならぬ、其れには第一には清潔にして置く事である、小兒に乳を含ませる前後には之れを清く拭うておく、其れに乳房は突出して居る部分であるから外方からの損傷を避けねばならない、之の二點を日常心掛てをれば大いなる過失は起らぬものである。

先づ疾病と言ふ程のものではないが、乳が出過て困る事がある、哺乳をする間の休の時にもダラ〳〵と流れて著物を穢す、只に衣服が汚れて清潔に保つ上に困難なる許りでなく、頗る不愉快のものである、其の上、絶えず濕潤つて居る事が刺戟となつて炎症や發疹を生じ易い。斯樣に絶えず乳の流れ出る者は如何に處置すべきものであるかと言ふに根本的に留める事は出來ない、「ガーゼ」か其の他清潔な布で靜かにおさへて置くがよろしい。

次に乳房に硬結の出來之れに觸れると痛みを感ずる事がある、之れは乳の瀦留が原因となつて起るものである、十分に乳が吸い出されない時一體に乳が張つて不快を感ずる事もあるが又一部分に殊に多く上方に硬結を現はす事がある、これは著物が觸れても、又一寸輕く當つても氣に障るものである、扨之を防ぐ豫防としては乳が停滯せぬ樣に心掛る事、若し已に出來て障碍があつたなら何か油を溫ためて之れを以て輕く其上に摩擦する事で、又常に乳房を高く括り上げる樣にして置く方がよろしい。

乳房は元來神經が細かく分布して居る所であるから小さな傷があつても甚だ痛みのあるものである、哺乳して居ない時には氣の付かぬ事もあるが、乳兒が乳房に付いて吸うと痛みを感ずる、時にはそれが堪え難くどうにも吸はせる我慢の出來ない事がある。其外時には乳兒が乳を吸ふ時其傷から血液を乳と一所に飲み込事がある、若し其量が少しく多い時は之れを吐く事がある、之れを早計に考へて乳兒の胃か

ら出たと思ふて驚く事がある、尚其傷を小さいと言ふて放擲して置くと之れから細菌が侵入して後に言ふ乳腺炎を引き起す事がある、此の注意は、モツト早くから、即ち出產の前から爲すべきもので、產期に近づくにつれて乳房も大きくなるのであるから、之れに傷を付けぬ樣又少しでも傷が出來たなら早く手當をする事である、兒が生れて哺乳する樣になつたならば尚更の事である、乳房が乳汁や唾液で濡れて居ると殊に傷つき易いのである、一度裂創が出來ると、只に痛みの苦がある許でなく、傷自身の癒り方が惡い、それかと言ふて飲ませずに置くと乳が出なくなつて上つて仕舞う、若し一方の乳房のみに出來たのであれば、その方を一時授乳する事を止めて主として健全の方の乳房にのみ付かして早く癒す樣にする、又哺乳の時だけ乳房に護謨の帽子の樣なものを被せて保護してもよろしいが之れは乳の出方が惡いので小兒にとつて不愉快である。

乳房に於ける疾患中尤も主なるものは乳腺の炎症である、之は多く哺乳してゐる時期に起るもので直接授乳に影響を及ぼすものである、どうして起るかと言ふに其の原因は化膿菌である、これが侵入して來て化膿性の炎症を起し即ち膿を持つに到るのである。而して此細菌が侵入するには、前にも記した小傷からする事もあれば、また乳の出て來る通路から入る事もある、其の起り初には乳腺の疼痛と緊張つてゐる感じがするのみであるが、間もなく、一部に硬い所が出來、遂に上の皮膚が赤くなつて來る、それと共に一方には熱が出で又何となく病氣である樣な重い氣分になる、かくて乳腺の一部又は大部分が化膿するのである。

之れに對する治療は如何するか、元より醫師の下を俟たねばならない、時期の早い程治療上便宜あるのであるから早く診てもらはねばならぬ、然し疼痛が強く堪え難たいものであるから其れには布か繃帶で乳を上に吊上る樣にするのがよい、布を肩からして乳房の下に掛て高く吊るす樣にする、乳腺炎に限ら

す凡て乳の疾病で疼痛を伴ふ場合には斯く高く吊上げる事によつて其疼痛を減殺する事の出來るものである。

かく乳腺炎に罹つた時、其乳を哺乳して宜しいものか、どうかと言ふ問題であるが、一般に止ずに緩いて哺乳して差支ない事が多い、然し母體に高熱が出たり、哺乳兒に下痢等腸胃の障碍が起つて來た時は一時止める方がよい、兎に角醫師の指揮に從つて乳の方も調べてもらつた上で爲るのがよろしい。

小兒と住居

「日光と空氣の這入らぬ處には醫者が入込む」と申しますが、世の中がせゝこましくなり、殊に我も我もと都會に押掛けて來て無理な生活をする今日となつては、家屋の衞生狀況は益々不良となつて來る。而して此等の社會的衞生の不良より影響を蒙むることの最も著しいのは、元來身體の虛弱なもの、就中小兒で、其の小さい程、幼い程惡影響を受けるのであります。市の中でも一定の場所、一定の家に於て小兒の病氣或は死亡數が多いと云ふことは明かなことで、特に夏期に於て年々目立て小兒の病氣や死亡の多い處があります、斯うなると、借家住居の人は、何うも此方は方角が惡かつたとか、此家は家相が惡いとか云ふことになるので、實際その家に住む家族は、大抵病人を出す、或は小兒を亡くすとか云ふことがある、その原因は何處にあるかと尋ねて見ますると、矢張方角とか家相とかゞ惡いとでも云ふものでありませうが、然し昔の人の云ふが如き神秘的の不思議の意味がある譯ではありません。つまり衞生上の缺點を以て說明すべきものであります。即ち家屋の在る土地、或は構造設備等が衞生上不適當である、例へば光線が不十分である、即ち日當りの惡い、じめ〳〵した陰氣な家、又風通しの惡い、黴が生えて、夏は蒸暑くつて居たゝまらないと云ふやうな家、此が先づ最も家相方角の惡い家と云ふべき

ものでありませう、これに加ふるに、狹い室内に、何時も多勢の家族が住むで居ると云ふことも衛生上宜しくない、右の二樣の原因が同時にあれば、これは無論宜しくない、衛生上大に有害であります。右の如き種々の衛生上不良の事柄を集めて出來て居る家屋は、東京の貧民の住宅に過るものはなからうと思ひます、殊に夏は甚しい。百軒も二百軒も同じ樣な長屋が軒を連ねて、それが大部分鐵葉葺であるから、冬は寒いが、その代り夏は釜焦にされる程暑い、家の内も家の周圍も不潔で、下水の流も良くない、それに屋賃は割合に高い、普通の家賃に比較すれば甚しく高い、一ヶ月の家賃は疊一枚につき五十錢から一圓位に當ることであります、斯樣に高いから從つて、さなくとも狹い家を復貸致しまして、二家族も三家族も同棲することになります、三疊に四人や五人は普通で、甚しいのは九人も住んで居るのがあつたと云ふことで、三疊に九人も寢る譯には行くまいと思ひますが、これが實際に調査をした結果であるから驚くべきではありませんか。

話は前に戻つて、夏になりますと、毎年小兒の死亡數が大變多くなります。これは夏期には消化器病が多くなるからである。小兒の最も多く死亡するのは何時もこの消化器病、特に腸胃病に依るのでありますが、夏はこれが多くなるから從つて著しく小兒の死亡數を增す譯であります、それに夏は、赤痢、虎列剌、或はこれに類似の烈しい急性の胃腸加答兒が起りますから、虚弱い小兒は斯樣な病氣に侵さるれば、容易に衰弱して死亡するのであります。

それでは、斯樣な消化器病を起す原因は何かと申しますと、腐敗しかけた食物を食べるとか、惡い病原菌を含むで居る生水を飲むとか、不熟の果物を皮を剝かずに食べるとか、氷を食べるとか、大抵飲食物の不攝生からである、又幼い小供では、牛乳が惡くなる、母の乳房が不潔になる、或は乳壜の吸口が不潔になると云ふやうなことが第一の原因で、これは普通誰も承知して居ることでありますが、此等の原

因は決して夏許あるのではない、飲食物の不攝生は秋でも冬でも胃腸加答兒を起す、尤も夏は寒い時よりも黴菌が跋扈する時節であるから、何うしても侵され易い譯ではありますけれども、併し病氣に罹つて死ぬるには、單に原因だけが其處に在つても罹ると云ふものではない、それには又身體の方に罹るべき原因がなければならぬ筈であります。又病氣に罹つたからと云ふて、必ず死ぬると限つたものでもない、此處にも亦その死ぬるべき原因が無ければならぬ譯であります。然るに普通の人は、小兒が病氣に罹れば、その小兒が病氣に罹るべき狀態にあつたことは考へぬ、只外の原因のみを見て、やれ何處其處で頂いたお菓子を食べたばつかりで斯樣な病氣になつたのであるなどゝ人を怨むことがある。又それが爲に死亡すれば、決して自分の家に於ける取扱の間違つて居ることや、惡かつたことには氣がつかない、唯此の病氣に罹つたから死んだのであると思ふことが多いのである。斯う云ふ風に子供が病氣に罹り、或は死亡するのには、自他、内外、又見ゆる見えざる種々樣々の複雜な原因があるが、夏期に於ける小兒死亡の多い原因の中には、暑さと云ふことが直接間接に餘程の關係を持つて居る、卽ち暑い室内に小兒を置けば身體が弱る、病氣は治癒しにくい。何うして暑い室は惡いかと云ひますと、大人でも暑い室は苦しいが、小兒は容易に汗をかき、元氣が無くなる、或人は、高度の外氣溫は、哺乳兒の身體には日射病と同樣の意味に作用すると云ひ、又他の人は、暑さの爲に食物及榮養上に變化を起す、これが小兒の夏期に病氣することの多い原因であると云ひ、第三には、尤も主として慢性の病氣に就ての話ではあるが、光線と空氣の不十分なることが、小兒の疾病又は死亡の大原因であると云ふのであります。何れにしても、都會に於ける貧民社會の小兒の死亡數の多いことは、單に乳の不足のみではない、衣服の惡いのみではない、住居の惡いと云ふことも少なからぬ關係を以て居ると云ふことには異論が無

からうと思ふのであります。然るに衣と食との方は隨分注意され、所謂慈善家も食物や衣服は惠むけれども、住居の不衞生が貧家の小兒、特に都會の貧民の小兒に惡影響を及ぼして居ると云ふことには少しも氣がつかないらしい、それで普通の家に於ても、小兒の爲には其室に一層の注意を拂ひ、殊に夏期の小兒の寢室、就中病氣の時などには十分其の病室の衞生狀況に氣をつけられんことを希望し、併せて貧民の爲に衞生的の廣い長屋を拵へて貸すと云ふことは、非常な功德であることを世の慈善家に告ぐる所以であります。

小兒兩便の始末

御承知の通り、哺乳兒は頻回排尿するもので御座います、迚もおしめを濕さぬことは六ケ敷う御座いますけれども、少し無性にして置きますと、忽ち臭氣を放つやうになります、殊に夏は甚しい、無性なお母樣は、自分の子供の臭いのは鼻について反つて氣にならぬ、無責任の乳母や子守は、面倒だから構はぬと云ふことになりますが、他人は幾ら可愛らしい子供でも、その臭氣に辟易して一寸抱く氣にはなれません、斯樣な有樣になつて居れば、小兒の軟弱なる皮膚は、その刺戟に由て糜爛を生じ、延いて種種の障碍を惹起すことにもなるのであります。併しこれは、少しく注意するならば、決して人に厭はれるやうな不潔な有樣にしなくつとも濟む、又小兒自身を苦めずして濟むことであります。つまり、おしめの濡れる度每に始末すれば宜しいのであると云へば、それはなか〳〵容易でないことのやうに考へられますけれども、實はそれ程煩はしいものではないのであります、苟も一人の人間を育て上げやうと云ふ犧牲獻身の覺悟あり、且つ己れの子に對する止むに止まれぬ自然の愛情に滿ちて居る母親に取つては、殆ど厄介である煩はしいと云ふやうな考は起らぬ、起つても極めて輕い筈のものである、又小兒

の養育を託されて、それを專務にして居る所の乳母に取つても、常に襁褓を清潔に保ち、小兒を濡らさぬと云ふことは、決して無理な要求ではない、これが出來ないと云ふならば、西洋ではいざ知らず、我邦に於ては乳母の勤の中を怠るものと云はなければなりません。

斯う申せば大分無理な事を責めるやうにも聞えますけれども、苟も小兒を愛し、常にそれが爲めに傍に附て居るとすれば、大抵小兒の樣子に出ても、已に催す時分であると云ふことが分からなければならぬ筈であります。尙は小兒は一日に何の位尿や便を排泄するものであるかと云ふことを知つて居れば、絕えず排泄して居る譯ではありませんから、何時間目位に氣を付ければ宜か大抵見當がつく筈であります哺乳兒の排尿度數は、大凡授乳度數の二倍であります、大便は平均二十四時間に二回でありますけれども、一回乃至は三回でも、尙ほ病氣と云ふものではありません、全く健康であつても一回しか通じのない小兒もありますし、又三回づゝあつても他に何の障のない小兒も御座います。而して乳を飮むで間も無く、眠る前に能く排尿するものでありまして、其間に尙ほ一回又夜間一二回致すものであります。斯うは申しますけれども、小さい哺乳兒では、少しも濡らさぬと云ふ譯には參りません、そこが所謂おしめのおしめたる所以で、尿を濕して取る布片の義であります、併し尿に濕して置くのではありません。それで濡れた度每に直ちにおしめを交換へてやらなければなりませんが、小さい哺乳兒は、授乳の後よりも、授乳前におしめを交換へる方が宜しい、と云ふのは、多くの小兒は少し烈しく動かしますと容易に乳を吐くからであります、それ故、通常乳を飮むだ直ぐ後におしめを濡すものでありますけれども、食事の後は暫時靜にして置かなければなりません。先づ大體これ位の事で、通常別におしめ交換の規則を確定することは出來ません。只も一つ附加へて申して置きますが、小兒が眠つて居ります時には、お

しめを交換る爲にわざ〳〵目を醒さすには及びません、但し創でも出來て居る場合には止むを得ぬことであります。この場合には、常に其部を清潔にして、清潔なおしめを當てゝ置くと云ふことが、旣になるべく速に創を治癒すと云ふ目的にかなつて居ることでありまして、濡らして置いては、創の治癒が妨げられます。

便通のあつた後には、勿論その都度洗つてやるのが當然で、卽ち微温湯を以て洗ひます、併し尿をしたときにも何時でも洗つてやるべきものかと申しますと、これに就ては意見が分かれて居ります。兎に角軟弱なる小兒の皮膚を手荒く取扱ふことは甚宜しくない、彼のリゾール或はその他の消毒液などを使用することは避けなければならぬ、餘り洗ひ過ぎるのも宜しくない、清潔と云ふ考は宜しいけれども、斯様に過ぎたことを致しますと、皮膚に小さな目につかぬ程の創が出來ます、そうすると皮膚傳染を防ぐに最も有力なる表皮の自然の生活機能を傷ふことになりますから、反つて種々の皮膚病に侵され易くなります。

清拭きますのには、日本紙は廉價で最も適當なものであります、殊に櫻紙などのやうな軟いものが宜しい、彼の不潔にして粗糙な淺草紙と云ふ如きものは、間違つても用ひてはなりません、危險この上も無いものであります。普通は紙が適當でありますが、綿は最も宜しい、特に創のつき易い傾がある場合には、清拭には是非綿でなければなりません、それから注意すべきことは、女の兒では、前から後の方へ拭いてやることであります、さうでありませんと、腸の黴菌が尿道の方へ來て、それが爲に淋病のやうな症狀を起したり、膀胱加答兒などを惹起すことがあるからであります。

次には藥粉でありますが、これは小兒の取扱に少しく注意致しますならば、殆ど無くて濟むものであります、併し大抵の小兒、特に病院に入院して居るやうな小兒には、さうも參りません。粉をつけます

のには決してお白粉のやうに厚く塗つてはなりません、薄く撒布して、その餘分の所は、ガーゼか繃帶の端で皮膚の皺襞の處から除かなければなりません、凡て過度の事は不可ませんが、粉を澤山つけることも有害であります。小兒をお取扱ひになつた方は、經驗のあることゝ思ひますが、厚く粉をつけますと、股の附根の皺の所に尿の浸みた刺戟性の泥狀物が固著しまして、濡れた度毎に能く拭き乾かしませんと、その部分が赤くなつて糜爛たりするものであります、そこで、あれ程よく粉をつけてやつて居るのに何うした事かと疑はれますが、反つてつけ過ぎた結果斯樣なことが起るのであります。

粉をつけるのには、蓋に小さな孔の穿いて居る箱を用うるのが宜しい、綿でつけますと、經驗上兎角一度用ひたものを、そのまゝにして置いて、その不潔になつた綿を以て新しい粉をつける傾がありますから、箱に入れてその孔から振出した方が便利で且つ清潔に出來ます。粉としては、安くて良いのは滑石粉或は白陶土でありますが、最も良いのはツセノール撒布粉の如き脂肪粉であります、但しこれは能く乾いて居るやうに保存しなければなりません。脂肪粉は單に乾かすばかりでなく、又多少濕潤を防ぎますから、創の出來さうな傾のある場合には至極宜しいのであります。只の澱粉は分解し易いので適當でありません。

家庭衛生

齒石に就て

近年に至りまして、齒と全身の健康とは密接の關係のあるものであると云ふことは一般に會得されて參りまして、學校でも軍隊でも齒の養生法を重んずるやうになりましたのは、全く齒科學、衛生學の進歩と申すべきもので御座いますが、尚ほ齒の養生と云

へば、専ら齲歯だけの注意に止まつて居りまして、其他の事は殆ど知られて居らぬやうに思はれます。單に歯のみならず口の爲に害となることで、而かも非常に多い一種の歯の故障があります、所謂歯石卽ち俗に歯齷と稱するものであります。

歯石は除いて、これから起る所の惡い結果を防ぐことが必要なのでありますけれども、今日でも矢張反對して「歯齷は歯を堅めて丈夫にして置くものであるから、これを除けば歯が弱くなる」と云ふ人があります、これは全く考違であります。

歯石には二種類を區別することが出來ます。この一つは、唾液から析出された所の歯石でありまして、灰白色「或は帶黄」白色をして居りまして、食物の滓や、水から沈著したものや、煙草の脂などの混じつたもので硬い塊となつて歯を被ふものであります、斯樣になつて居りますと惡い臭が致しますし、口が不潔に見えますから、清潔と云ふ點からもこれを豫防し、これを除かなければなりません、少しく注意して歯を磨けば、これは容易に防ぐことが出來又除くことの出來るものでありますが、危險なのは第二の種類の歯石であります。卽ち石灰鹽類と黴菌の塊から出來て居る所の歯石でありまして、歯齦の下に出來て、往々歯の根から尖まで被ふことがあります、而して綠色或は褐色で、石の如く堅く、非常にしつかり歯に著いて居るものであります。

一體歯と云ふものは咀嚼器として甚だ完全に出來て居るもので、その各部分の形でも、構造でも接合でも非常に堅固に出來て居りますけれども、一つ弱點と云ふべき所は歯が歯齦から外に現はれる部分であります。健全な歯齦であれば、彈力組を以て締つたやうな具合に歯の頸の所をしめて居るものであります、所が歯石、特に前に述べた第二の種類の歯石が歯の頸の所を環のやうに取卷て出來ますると、この彈力性の歯齦の帶が緩みまして、段々歯齦の囊が出來るやうになつて參ります。而して其の歯石の壓迫と傳染作用とに依て、歯齦に炎症が起つて、ブクブ

くになつて出血し易くなり、齒齦が齒から搔起られるやうになり、此の齒と齒齦の間に出來た溝の中には、食物の殘滓や組織の剝れたものなどが容易に入込みまして、無數の黴菌が、この肥料の中に發育繁殖することになります。これは未だ比較的治癒し得る所の齒齦緣炎と云ふ狀態でありますが、これを等閑にして治療もせずに捨てゝ置きますると、齒槽膿漏と申しまして、顎の骨の緣の所が腐つて膿が出るやうになつて參ります。

齒槽膿漏と云ふのは、その主な症狀を言表はした病名に過ぎませんが、單に齒齦の所から少しく膿を漏らすと云ふだけではない、其他にも種々の症狀を呈して來るものであります。先づ第一に齒齦が齒から浮いて出來た所の嚢の中に膿が溜り、齒齦の上を壓せば膿が漏れるやうになります。それから此の紫色になつた齒齦が段々短くなりまして、齒齦乳嘴、卽ち齒と齒との間を塡めて居る所の三角の部分が化膿して溶けてしまひ、同時に齒槽、卽ち齒を顎骨に嵌込むで置く所の骨の箱も破れ、所謂齒が緩むでがく〳〵して參ります。

一體此の病氣の經過は、極めて緩慢なものでありまして、長い間に何時ともなく進行して、別に苦痛もなく起るものであります。

患者は往々齒齦から容易に出血することに氣がつき又齒の手當が不十分なれば口の臭い所から治療をする氣になることがありますけれども、普通は齒が弛むで、物を嚙むに難義になり、痛を覺えるやうになつて始めて氣がつくのであります。

斯うなつてからは、最早完全に效のある療治は六ケ敷いのであります。

この病氣で以て齒が全く滅亡することもありますが、その原因は全身病にあるか、單に齒石に由るか、或はこの二つの原因に由るものでかと云ふことは一寸議論のある所でありますが、齲齒と此の齒槽膿漏とは一致するものでないと云ふことは注意すべきことでありまして、殆ど何時も完全な少も傷のついて

ない齒が此病氣の爲にいけなくなるのであります。斯樣に弛むで來た齒は、殆ど助けやうがありませんけれども、併し今日の治療法に於ては、昔なれば直に鉗子をかけて拔いてしまふ齒でも隨分保存することが出來る、卽ち病氣の進行を止め、少なくとも齒の拔けるのを長持させる事が出來るのであります。それでこの病氣を早く認めて治療を加へ、殊にその原因を警戒すると云ふことは極めて必要なことである。乃ち一般に齒石の害あることを知らしめ、養育者、敎育者等ももう一層その子弟の齒に注意する義務があらうと思ひます。

斯くても夏は凌ぎ得る

昔の人は避暑などゝ云ふ事を知らなかつたものらしい、今日の人は六月末には、はやあわたゞしく都會を逃れて海濱や山地に行く、これはつまり生活程度が高くなり、衞生思想が發達し、交通が便利になり、一方に於ては都會の人口が多くなり、業務が劇しくなり、一般に生活法が昔に比して遙に苦しくなつた結果であらうと思はれるが、併し尚ほ歐米人の眞似、贅澤、身體並に精神の薄弱と云ふ事も避暑流行の一原因であらうと思はれる。實際避暑は、身體の爲にも精神の爲にも衞生上推奬すべき有益の生活法の一つに相違ない、特に小兒には休暇中、賢明なる保護監督の下に避暑をさせ度いものである。併し今日では、避暑し得る程の人は、云はずとも避暑をするが、その從事して居る職務の爲に、又は貧の爲に避暑し得ぬ人も少なくない、實は予の如きも其の一人であるが、未だ曾て避暑をせぬ爲に身體を惡くしたことはない、反つて夏は何時も身體が丈夫になり體量が增す、それ故に予の消夏法を鼓吹すると云ふ譯ではないが、多少の參考にもなることあるべきを思ふて、斯くても暑は凌ぎ得ることを一言する次第である。

醫者の不養生と云へる俗諺があるが、實は予も其の

醫者の一人である、併し易者身の上知らずと云ふ非れよりは身の上を知つて居る積である。此夏も必ず強健で、少々位の不養生に依て身を傷ることもなく、反て體量を増し元氣を増すこと夢疑なきものと確信して居る。

○起牀　朝は四時か四時半に目を醒ます、こゝに於て蚊帳を去り、總の窓を悉く開放たしめて、夢心地の去り、頭腦明快となるまで靜に牀に横つたまゝ大凡五分間深呼吸をやる、而して確かに現在の我今日の人となつた所で、徐ろに牀を離れる。

○掃除　室内の掃除は大嫌である。甚利己的であるが、ハタキとホーキとを以て塵埃を舞起てる流儀の掃除は、最も不衛生的の掃除法で、何とか改良しなければならぬ事であるけれども、習慣上當分止むを得ぬこととして、これは女中を身代に立て、自分は猫の額程の庭園の掃除をする、庭は適當に夜露の濕を持つて居て塵埃は起たぬ、それを竹箒にて遠くから掃くのであるから殆ど塵埃は吸はぬ、反つて周圍の緑の中より湧き出す新しい涼しい爽かな空氣を深く呼吸することになる、これは確かに快き勞働である、それから朝顔の鉢を臺の上に陳列する、これが十分乃至十五分間の朝仕事である。

○冷水摩擦　庭下駄を脱棄て直に湯殿に入り、水道の水にて面から頭を洗ひ、次に四肢軀幹凡て一應濡手拭にて濕し、それから五六杯小桶にて水を浴び、乾燥したタオールで拭き乾かす、但し予は強く摩擦することは嫌である。齒磨含嗽だけには湯を用ひる。

○衣服　夏の衣服に關しては、予は裸體主義である、許さるゝ限は裸體で居る、朝起きてから朝飯に至るまでは全く裸體である、只蚊に螫されるのは辛いけれども、それでも尚ほ裸體の方が好い心持である。彼のマラリヤ即ち瘧を起さす原因となるアノフエレスと云ふ蚊は、東京邊には餘り居らぬやうであるから、そら恐るゝに足らない、平常衣服を纏ふて居るから、偶々裸體になると何やら危險なやうな氣もし、反つて心持が惡く、感冒などにも罹り易いやうであ

るけれども、是は全く習慣である。少しく慣れさへすれば、親より貰ふた身體に不足はない、生れながらに着て居る天然自然の眞正の衣服で澤山である。少なくとも夏は室内に居る時だけでも、遠い〳〵御先祖の風態を學ぶが宜からうと思ふ、私は小兒までも要らざるお化粧をさして、美しい衣服を著せて、汗をかゝして行儀好く坐はらせて置くのを見ると、文明と云ふものは何たる情ない愚な眞似をして自ら苦しみ人を苦ませるものであらうと叫び度くなる。小兒を此等の苦痛から放免すると非常に悦ぶものである。予の如きも、衣服と云ふものは大嫌であるが、止むを得ず洋服を著なければならぬ日には、日中になつて急にシャツ、ズボンシタ、白シャツ、扨はカラー、カフス、上著などゝ肌に著けなければならぬと云ふ事になつては、卒倒もしかねまじき責苦を覺えるから、その時だけは朝の涼しい中にシャツとズボンシタだけは著て置く。家に在ては人に接する時は、極めて簡單な袋の如きチヽミの手術著を用ふて申譯をして置く。其他は全く裸體である。是で以て元來強壯の體格ではないが、未だ曾て之が爲に夏感冒を引いたなど云ふことは殆どない、反つて之が爲に皮膚の丈夫になることは確かに經驗して居る、秋冬にも容易に感冒に罹らないが、矢張夏裸體で皮膚を堅固にして置く御陰であらうと思つて居る。小兒は腹部を冷せば腸に感作を及ぼして下痢を起したりする傾があるから、腹卷だけはさせるけれども家の中では矢張朝から裸にして、全然野蠻的に放任して水悪戯をさして置くが、他家の秘藏兒に比して病氣をするやうな事は甚稀である、しかのみならず、矢張夏の中に皮膚が強固になり、且つ身體發育上の缺點なども明かに知ることが出來て、十分矯正することが出來、餘程有益なることを經驗して居る。唯婦人等に對しては、今日の所裸體主義の實行を迫る譯にも行かぬので、麻の著物に幅の狭い單帶を勸める、且つ小兒の如く多少腹部を冷さぬ用心をさせる、併し矢張裏長屋のオカミサンの風態が最も宜しいの

である止むを得ず單衣を著る時には、脱ぐや否や直ちに盥の内に投込むで水洗をさせ、一旦汗になつた著物は間違つても著ぬことにして居る。又洗濯をした著物に糊を附けて、丸で紙人形の様に角張つた單衣を悦ぶ奇風があるが、實に嫌なことである。折角洗濯をして清潔にした衣服に、わざ〳〵不潔物を塗込むのである、例之無害としても何萬億か知らぬ無數の黴菌をざわ〳〵衣服に塗抹するは決して賢明な洗濯法とは云へぬ、寧ろ洗濯とか清潔とか云ふ意味に矛盾した仕方である、斯様な不潔物を塗り固めた衣服を以て汗になつて居る皮膚を摩擦するから夏は癤腫や癰などを出來し易いのであらうとも思はれる

○○飲食　衣服に就ては、前述の如く、少なくとも夏だけは裸體主義を取るが、之に反して夏の食物は一切煮熟主義を取る、從つて支那料理は結構であるが、西洋料理に至ては殆ど落第である、實際生物を食へぬと云ふよりも、何でもかでも煮て食べると云ふやうにすれば、赤痢とか虎列剌とか云ふやうな夏期に流行する傳染病の十中九否十迄防げる。肉類は概して危険の度が頗る多くなる。肉類の中の毒は煮たからと云ふて消えぬものがある、罐詰ならば安全であらうと思はれるが、これは最初から多少不安心なものであるのに、一旦蓋を開た後は非常に速に惡變する傾がある。氷漬の魚肉も之と同様で、氷から離せば、忽ち變敗するものである、特に刺身などは最初から恐るべき料理である、要するに夏は何れにしても肉食を斷つが安全の策で、若し脂肪が欲しいと思へば、野菜類例へば馬鈴薯の如きものをバタなりフエットなりにて揚げるとか、混せて煮るとかすれば澤山である。是非肉が欲しいとならば、日本一流の鍋焼が宜しからうと思ふ。次には食慾の無い時に唐辛や胡椒や山葵や生姜のやうなものを利用して無理に胃に押込むことは宜しくない、必ず胃を害する。

それでは自分は實際夏の食物を如何にして居るかと云ふに朝はパンを燒いてバタを附けて食べる、それに煮た果物を少々食べる、それから番茶を飲む。晝

飯は朝に炊いた冷飯に種々の精進料理であるが、兎に角煮たものを食べる。果物は總て生で食べるが、桃の如きものは煮て食べることもある。夕飯とても別に變はない、要するに一般に煮た食物を稍や控目に食すると云ふことを原則に立てゝ居るまでゞあるが、單にこれだけで以て、食傷や霍亂を免れ得るものと信じて居る。水は水道の水なれば大抵生で飲でも差支ないとは思ふが、これも習慣で生では恐しい氣がして、咽の渇く時は茶を飲む、或は麥湯、サイダーなどを飲むこともある。冰は危險なしとは云へぬが、取扱の上に於て不潔でなければ、氷そのものは左程危險ではない、併し直接に冰を噛るは嘉すべきことでない、冰屋の削つた冰、コップ、匙、特に其の砂糖水に至ては、頗る怖るべきものである。これ等のことを考へたゞけでもかなり寒氣を覺える。此等の危險がないにしても、冰を直接胃の内に送つてやれば、胃の粘膜は痲痺して、一時消化作用を止め、且つ其内の食物が胃で受けるだけの消化を經ぬ中に急いで腸の方へ送り出される、腸も反射的に運動を高める、斯様な原因に由て胃腸加答兒を起し易いから、總ての點から見て餘り冷たい物を食べるのは宜しくない。併し食事の間に少量の飲料、サイダーの如き清涼飲料を用うるは差支ない、これに由て胃液の分泌を催す功がある、多量に飲めば胃液を薄めて害がある。

○仕事　は出來得るだけ簡易に、頭を苦めぬ程度に止める工夫をする。止むを得ぬ責任のある用事は、朝二三時間の間にかたつけ、後は何うでも宜しいと云ふやうな樂な仕事をする、必要があれば又雜方に一時間程眞面目な仕事をする。

○午睡　一時から四時迄の間に於て午睡をする、大抵一時間或は一時間半、これよりも長く睡眠をすると、反つて後が不快である。眠を醒した後は、冷水で洗面し、全身を拭き、暫時輕く靜な手足の運動をし、運動と云はんよりは背伸をし、手足を延ばす位の運動をして、大抵ハンモンクに乘つて讀書をする。

〇沐浴　朝に冷水摩擦を行ひ、午睡後に身體を拭き、夕刻には一回石鹸を使つて行水をする。行水の後は蚊を防ぐ爲に、單衣を纏ふことにして居る。

〇散歩　大抵夕食後一時間位散歩し、歸つて後熱湯を以て脚を洗ふ。

〇蚊遣　一室を閉ぢて、其中に五六本蚊遣線香を燒いて、蚊の全く斃れた後、悉く窓を開けて空氣を入れ替へて、其室に入れば、暫くの間は蚊軍の襲擊を免れる。近年大阪邊で製造する綠色の蚊遣線香は能く蚊を殺すが、これを焚いてる室内に居れば、かなり烈しく呼吸器を刺戟し、頭痛を覺える。小兒の寢て居る室内などでは決して焚かぬやうにしなければならぬ。

〇就眠　夏は十二時過でなければ、どうしても眠れぬと云ふ人もあるが、私は矢張十時には牀に就く。雨天の時は窓を閉ぢるけれども、晴れて居る夜は大抵窓を開けて置く、而して特に暑い夜は腹部をフランネルで卷て裸で寢る、初はいやに肌が濕つて冷えるやうで心持がよくないけれども、これも習慣で、容易に感冒を引くやうなことはないものである。腰から下を被ふて寢ないと、翌朝になつて脚部が惰るいけれども、これも慣れば左樣なことがなくなる。尙ほ一つ私は、夜牀に就た時も五分間程靜に深呼吸をして眼を閉ぢる、決して何式の呼吸法など、云ふ六ケ敷い方法ではない、只靜に深く呼吸をするだけのことである。これでも私は效のある事を認めて居る。

暑中に於ける予の生活法は、大略右の如くである、極めて平凡なものである、而かも此で實驗上夏病氣をした事もなく、銷暑中に靜養が出來、身體も强健になることを經驗して居る、故に少なくとも予に取ては滿足なる生活法と心得て居る、若し他人が斯樣にしたならば害があるかも知らぬけれども、兎に角斯くても暑を凌ぎ得る事の實例を擧げて、幾分の參考ともならば幸と思ふのである。

看護法（承前）

（三）頭部及び顔面

頭は熱く感ずることがあり或は冷たく感ずることもあり又屢々頭痛を覺ゆる場合があります。頭痛は必ずしも何時でも頭全體が痛むと云ふ譯のものではありません、頭の左右半分だけ痛むこともあり、頭の前の方に痛の在ることも、後の方だけに限らるゝ場合も御座います、且つ神經痛に於きましては、所所に壓すと強く痛を感ずる點があります、例へば眼の上とか、頂の所などにさういふ點の在ることがあります。

顔面は赤いことがあり、蒼いことがある、又半側だけ麻痺することがあり或は全く麻痺して面のやうな顔付になることがあり、時として顔の或る筋肉が痙攣を起して奇妙な運動をすることがあります。

眼は澄むで見えることがあり、曇て見えることがあり、或は赤く又は黄色になる場合があり、視力は弱くなることがあり又全く視力を失ふこともある、又多くの患者は、眼の前に物のちらつくことを訴へるものであります。目付きは穩であるか凝視るか或は斜視のことがある、例へば腦病などの時に急に斜視の起ることがあります。

鼻は濕ることも、乾くこともある、その分泌物は粘液性のことがあり、膿性のことがあり、或は惡臭を放つ所の固い塊となつて出されることがあります。又往々鼻より出血することがある。呼吸困難の際には鼻翼が動くものであります。

口脣は蒼白、紅色、青色を呈し、乾燥し或はがさ〳〵し、舌は乾燥し、濕潤し、清潔に或は舌苔を被むり龜裂を生じ、容易に出血し或は潰瘍を生じ、特にその邊緣の部分に生ずることが多い、齒齦も同樣の症狀を呈し、口腔の粘膜も同じやうな病狀を呈することがあります。口腔粘膜には時として白い乳のやうな苔の出來ることがあります、所謂鵞口瘡と云ふものであります。口腔腐爛、齲齒、胃病などの時に

は患者の口は惡い臭がし、患者も亦胸が惡いとか、噯氣が出るとか云ふことを訴へ、嘔吐することがあります。噯氣の味は胃病の診斷の際に意味があることであります。

口蓋、扁桃腺及び咽頭の外觀は重要なことでありまして、咽頭加答兒などの時には赤くなり、實扶的里の時には白の苔で被はれ、扁桃腺の膿瘍では、扁桃腺が大きく腫れ、潰瘍面も亦同じ所に出來ます。耳では發疹、濕疹、癤腫、耳漏等に注意をする。病人は耳鳴、疼痛或は重聽を訴ふる事が屢々あります。

（ホ）肺及呼吸

呼吸は安靜であるか或は疾速であるか、規則正しく行くか、輕いか重かである、深呼吸をする時には、肺結核や肋膜炎は刺すやうな痛を感ずることがあり氣管枝加答兒、殊に喘息などの時には、胸の所に笛のやうな音や、竹筒を吹くやうな音が聞えます。咳嗽は乾いた咳嗽の出る時もあり、緩い咳嗽のこともあり、非常に痛を感ずることもある、格得布とか氣管枝炎とかの時には粗糙な吠えるやうな咳嗽が出るものであります、喀痰は少ないこともあり多いこともあり、粘液性、膿性のことありて、錢のやうな形をして水に浮くことがあり、沫を含むことあり、血液を含むことがある、而して例へば肺壞疽などの際には驚くべき臭氣を發するものであります。

聲音は澄で居るか、物が引掛つて居るやうな音であるか、枯れて居るか或は全く聲が立たなくなります。

患者は、決して痰壺の外に痰を吐くことのないやうに嚴禁しなければなりません。ハンカチーフに痰を取るのが大變行儀の善いことのやうに心得て居るがこれ程危險な習慣はありません。その痰が乾いて、次に引出す時に撒き散されますから呼吸する空氣に混ざる而して病人の周圍の人に迄危險を及ぼすことになります。

痰壺は口の廣い硝子製の不透明のもので、何時も石炭酸或はリゾフォルムのやうなものを以て一部分滿たして置かねばなりません。大勢の人の居る所では

陶器製の壺で宜敷いが、砂などを入れて置かずに必ず消毒液を滿たして置て、決してその內より喀痰が乾いて飛散することのないやうにしなければなりません。衰弱して居る患者では、咳嗽をして痰を出す時には、痰壺を口の邊まで持ていつてやらねばならず、同時に他の手を以て枕の下から頭部と上體を少しく起して支へてやらねばなりません。（以下次號）

雜報



○產婆學校及講習所指定規則

同規則は六月十八日の官報にて公布せられたり、卽ち左の如し。

內務省令第九號

私立產婆學校產婆講習所指定規則左ノ通定ム

明治四十五年六月十八日　內務大臣　原敬

私立產婆學校講習所指定規則

第一條　私立產婆學校、產婆講習所ニシテ產婆規則第一條第二號ノ指定ヲ受ケントスルトキハ其設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ地方長官ヲ經由シ內務大臣ニ申請スベシ

一　名稱、位置、設立年月日
二　學則
三　教室ノ數、其ノ坪數及生徒定員
四　實習用ニ供スル妊婦ヲ入院セシムヘキ室數、其ノ坪數及其ノ入院定員
五　生徒寄宿舍ノ設備アルトキハ其ノ室數、坪數及寄宿生徒ノ定員
六　教授用及實習用ノ器具、器械、標本及模型ノ目錄
七　設立者ノ履歷及教師ノ氏名其履歷擔當科目
八　最近二年間ニ於ケル實習用妊婦ノ入院、往診、外來ノ別、一日平均人員
九　實習用ニ供スル妊婦ノ入院料ノ徵否、若本人ヨリ徵收スルトキハ其ノ金額
十　現在生徒ノ學期別人員
十一　卒業生ノ員數及卒業後ノ情況
十二　經費及最近二年間ノ決算
十三　維持ノ方法
十四　敷地建物ノ圖面

第二條　指定ナスベキ學校又ハ講習所ハ左ノ各項ニ該當シ內務大臣ニ於テ其管理及維持ノ方法確實ニシテ其ノ成績佳良ト認ムルモノニ限ル

一　生徒ノ定員ニ對シ相當ナル教授用建物、器具器械及妊婦ヲ

二　入院セシムヘキ產室ノ設備アルコト
入學資格ハ高等小學校卒業若ハ高等女學校二年以上ノ課程ヲ修業シ又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スルコト
三　修業年限ハ學業實習ヲ通シテ二箇年以上ナルコト
四　主要ナル學科ハ一箇年以上主トシテ產科診療ニ從事シタル醫師ヲシテ擔當セシムル事
五　生徒一人ニ就キ在學中五回以上臨產實驗ヲナサシムル成算アルコト內三回以上ハ入院妊婦タルコト
六　以上ノ事項ニ適合シ一箇年以上經過シタルモノナルコト

第三條　指定ヲ受ケタル學校又ハ講習所ニ於テハ第一條第一號乃至第五號第七號第十三號ノ事項ヲ變更シタルトキハ遲滯ナク地方長官ニ屆出ヘシ

第四條　指定ヲ受ケタル學校又ハ講習所ニ於テ別科生等ヲ入學セシムルトキハ其學資ヲ別册トスヘシ
指定ノ效力ハ前項生徒ニ及ハス

第五條　指定ヲ受ケルタル學校又ハ講習所ニ於テハ學則所定ノ授業時數中授業ヲ受ケサルコト三分一以上ニ及フ生徒ハ進級若ハ卒業セシムルコトヲ得ス

第六條　指定ヲ受ケタル學校又ハ講習所ニ於テ學期試驗若ハ卒業試驗ヲ施行セントスルトキハ十日前ニ地方長官ニ屆出ヘシ

第七條　地方長官ハ吏員ヲ派遣シテ試驗ニ立會ハシムルコトアルヘシ

第八條　指定ヲ受ケタル學校又ハ講習所ハ卒業試驗合格者ノ族籍氏名、生年月日ヲ試驗後遲滯ナク地方長官ニ屆出ヘシ

第九條　指定ヲ受ケタル學校又ハ講習所ハ毎年六月三十日ノ調査ニ依リ翌月中ニ左ノ事項ヲ地方長官ニ屆出ヘシ
一　前年度經費收支決算ノ細目
二　當該年度經費收支豫算ノ細目
三　現在生徒ノ學期別人員
四　前年中實習用ニ供シタル妊婦ノ總數
同上ノ內生徒ノ臨產實驗ニ供シタル妊婦ノ數（入院、往診ノ別）
五　前年中卒業者員數竝卒業ノ情況

第十條　指定ヲ受ケタル學校又ハ講習所ニシテ本令ニ違背シ若ハ第二條ノ要件ノ一ヲ失ヒ其ノ他成績不良ナリト認メタルトキハ內務大臣ハ其指定ヲ取消スコトアルヘシ

○秋田縣衛生展覽會

先月二十二日より五日間秋田縣々會議事堂に於て衛生展覽會を開催せるが、其の出品種目は概要左の如くなりしさ。

▲內　科
各種傳染病細菌圖
蠅ノ汚物運搬ノ狀況並
「ケダニ」ノ圖及標本
其他病理標本

▲眼　科
トラホーム傳染ノ徑路並（說明付）
古代塵除眼鏡
トラホーム模型圖

其他解剖標本

▲小兒科

初生兒保育器
各種コンデンストミルクノ善惡竝ニ時代標本
哺乳器種類（各種）
牛乳輕便消毒器
身上運動器

▲產科婦人科

家庭ト淋疾關係諸
新舊分娩用具比較（實物）
雙胎畸形兒標本（實體）
癌腫透映標本

▲耳鼻咽喉及齒科

齒科器械及齒科衛生上參考トナルヘキ物品
諸種疾患ノ圖譜
未發諸種疾患ノ豫防說明圖
其他病理、生理標本

▲皮膚病黴毒科

黃癬、白癬標本
黴毒菌、淋疾菌標本
其他以上ニ關スル諸種ノ圖譜

▲外科

人體パントーム救急療法簡易裝置
凍傷實體標本
其他病理實體標本
毒草、藥草
毒蟲屋內外ノ人體ニ及ホス害蟲

傳染病其他諸種疾患ノ寫眞
以上ニ附屬スル統計

▲衣食住ニ關スル部

有害著色料標本
鑛物性色素標本
タール色素標本
有害性著色料ヲ使用シタル玩弄品及菓子
有害性色素及無害性色素ヲ以テ著色比較セシ紙、毛絲、羽毛著色野菜、昆布類、白粉
飲料水檢査反應（說明付）
鑿井ト掘井トノ地層ニ對スル良否ヲ說明シタル圖
芝原用水ノ上流ト下流トノ水質試驗成績
同上ノ細菌ヲ培養セシ標本
入浴中洗面、口嗽ヲ爲ス害（其不良ナルコトノ說明）
鷄卵ヲ食鹽水中ニ沈メタルモノ
鷄卵ノ新舊ヲ鑑別スルノ方法
鷄卵一個ノ成分摘出
罐詰數種
腐敗セシ罐詰竝ニ其鑑別法
室內消毒器
試驗用ノ動物　猿、兎、牛、馬、モルモツト、子ヅミノ類ヲ標本又ハ實物ヲ以テ示ス
全乳
脫脂乳
初乳
牛乳一合ノ成分摘出
煉乳、不良煉乳
乳球ノ良否圖
乳球顯微鏡供覽
牛乳榨取高表

乳　脂
マルガリン
乳脂、マルガリンヲ比較セシモノ
サツカリン
グルチン
ヅルチン
サツカリン入ノ飲食物
玩弄品試驗成績表
玩弄品類
防腐劑種類
白粉中ノ鉛ヲ簡易ニ檢査スル方法
鍍銀粉ト稱シ販賣スモノニシテ水銀劑ヲ混シタルモノヽ反應ヲ示シ
有害ナルコトノ注意ヲ與フ
酒、醬油、其他普通防腐劑ヲ加フヘキ飲食物ヲ陳列シ注意書ヲ附ス
防腐劑含有ノ飲食物
淸酒一合中ノ成分ヲ摘出シ其アルコホール等ヲ容積ニテ示ス
味淋、燒酎同上
酒類中ノアルコホール含有量表
アルコホール中毒ノ徑路及ヒ其結果疾病ヲ起セシ狂狀
ブランデー、葡萄酒其他ノ酒類
防腐劑取締試驗成績表
不良飲食器具
善良飲食器具
蠅取ノ種類
鼠取ノ種類
自動手洗器ノ種類
煙草各種
ニコチン
煙草中ニコチン含有量表
淸涼飲料水各種

不良ナル淸涼飲料水（蠅、蚊、硝子、等ニ入リタルモノ）
淸涼飲料水原料各種
市内飲料水檢査成績表
市ノ地下水ト水道水芝原川水ノ試驗成績ノ比較及說明
地表水ト地下水トノ試驗成績表
檢水採取器
砂濾過裝置（硝子入ニテ内部ノ裝置ヲ現ハシタルモノ）
同上内部ヲ現ハサヽルモノ
簡易濾過裝置
井水溫度計
防臭、防腐劑
哺乳器
體溫器
防寒具
電話口消毒器
消毒用發手拭掛

▲醫大家ノ書畫

醫大家ノ書畫類
同　肖像

廣　告

を評し、それより塙檢校其他の有名なる人にして明を失せる人々の事蹟逸事等を引きて眼の如何に貴重なるかを說き、斯く貴重なる眼に對して自然は如何なる保護裝置と防衞作用とを備へたるかに就き興味深き解剖生理上の說明を與へられ、午後二時半閉會別室に於て茶菓を饗し三時過散會せり。
當日の出席役員姓名左の如し(出席順)

鍋島會長　濱尾副會長　鳩山春子
羽田三緒子　山口貞子　高木鎵子
岡山こし子　宮本樂子　田村きよ子
岸　澄子　丹波貞子　守屋千代子
岡田德子　三浦敎子　三宅藤子
山本多穗子　吉市孝子

○新潟支會例會

同支會は六月三日午後七時半より同市婦人敎育會と聯合の上例會を新潟尋常高等小學校に於て開會せり出席者約二百名にして左講話あり非常の盛會なりき

一、勤め大事　中川内務省書記官
一、家の務　一木法學博士

○本會入會者

○北原善子紹介

●赤坂區青山南町六ノ一四七　通常會員　武市はる子

○柏原ちか子紹介

●日本橋區矢ノ倉町矢倉病院内　通常會員　塙さよ子
●小石川區戸崎町六十三　通常會員　秋山信子

○事務所申込

●北多摩郡東村山村大字南秋津　特別會員　比留間ひで子
●大阪府四成郡今宮村六二〇興業内　通常會員　田岡こし子
●奈良縣磯城郡櫻井町櫻井高等女學校内　通常會員　和川竹子

○新潟支會入會者

○吉村きよ子紹介　通常會員　山田秀子
○澤田いつ子紹介　通常會員　島田いつ子

○宇都宮支會入會者

○　岡田周子

○資格變更者

○特別ヨリ修身ニ　山口松子

○改姓名　高崎支會

○舊　松田松枝　新　佐藤なか子

○轉居

●呉市和庄町清札通一九三　稲地衣子
●岩手縣東磐井郡千厩町　淺田決
●府下荏原郡入新井村不入斗八〇〇　佐藤運雄
●大阪市西區土佐堀通一ノ六へ　植村妙子
●麴町區内幸町五へ　長與閣子
●麻布區本村町一四四へ　松原とよ子
●佛國大使館内へ　石井たま子
●四谷區大番町一九へ　比留間ひで子

稟告

来八月及び九月の例會は本會規則に據り、例年の通り休會致候也

暑中特に會員諸姉の健康を祈る

明治四十五年七月

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

明治四十五年七月十七日印刷
明治四十五年七月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込追分町二十九番地 莊司秋次郎

印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 今井甚太郎

印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鈴屋町 巨明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市本町三丁目 丸善書店

八月の巻發行 定價

壹冊貳拾八錢郵稅貳錢五厘
六冊前金郵稅共壹圓七拾錢

新婦人

油取附紙白粉添

急務たる夏季肺病手當……原醫學博士
夏季自宅美容法……東京美容院長 北原
癖毛縮毛を全癒した經驗……松下春子
八月の婦人好み……あふち子
女子大學評判記……宇宙兒
女の自覺病……朧君子

書道自宅獨習法……加藤しげ子
男に騙され易き女の缺點……澤田撫松
頭髪の福音 エンゼル香油の效果……市原蝶子
浴衣がけ 石版極彩色油繪……石川寅治筆
リボンの薫……コロタイプ極彩色入
表紙川村清雄畫伯筆(蘇武の友)……極彩色

鐵道沿線名勝案内
附錄電報頼信紙添

小說 崖くづれ 文藝協會女優林ちさせ孃作

寫眞版口畵は內藤千代子孃以下所謂新らしい女の肖像卅二葉 名媛の手形は珍中の珍……

卷末附錄 家庭日誌 八月分 溫度表晴雨表獻立表來客控●九星暦添

新婦人見本 郵券一冊錢・賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番